

九大広報

Kyushu University Campus Magazine

vol. **61**
2009.1

大
宝
九
至

旧制福岡高等
学校構内



特集

さようなら そしてありがとう 六本松

インタビュー・シリーズ九大人

櫻井 龍子

最高裁判所判事

荒谷 俊治

指揮者・第4代日本指揮者協会会長

ふろんとランナー

南石 晃明

農学研究院 教授

九州大学は2011年に100周年を迎えます



KYUSHU UNIVERSITY 100th 2011
知の新世紀を拓く

江戸ばなし

(五)

九州大学名誉教授

中野三敏

平成の今日に残る和本は極く少なく、従って極めて高価なもののように思われている節があります。これはある部分正しく、またある部分かなりな誤解があります。

まず、絶体量が激減している事は当然ですが、それは街中に目に触れるもののことで、図書館や大学等に入ったものは、一応減ることはありません。賣物の和本は、私どもの学生時代に比べれば確かに減ってはいませんが、実はそれでもまだまだ大量に存在します。その書価に至っては、時々の価値観に応じて、高いものは高く、安いものは信じられぬほど安いのです。例えば十七世紀初頭（今から四百年前です）のものでも、漢籍や仏書や雑記類の片々たるものは、千円以内でも買える場合は多いのです。とにかく十七世紀から十九世紀の出版物に関する限り、恐らく世界

のどの国よりも大量で廉価なものではないでしょうか。無論、高価な場合、一点で一億を超えるものも、近年ではそれほど稀でもありません。つい先年も芭蕉自筆の「奥の細道」が数億とささやかれて、「億の細道」と取り沙汰されたこともありました。高価なものが持て囃されるのは、何でも鑑定团的な人情でしょうが、実際それは1%にもあたりません。和本の大半は実は廉過ぎるのです。理由はこれ迄の価値観に応じて、最も江戸的なものに価値が見出されなかったが為に安いのです。つまり買手がいないのです。廉くて売れなければ古本屋さんも熱心になれません。結果、店頭でも余り目に触れなくなります。目にする機会の減少は和本文学の一層の底を招きます。読めなくなれば、書物というものは骨董的価値を除いて一層無価値にな

り、その存在の印象は益々薄くなります。和本の量と価値は、今やこうした負のスパイラルにどっぷりとはまり込んでしまったのです。

和本リテラシーの回復が果たされれば、多分こうした状況は一掃されることになるでしょう。それはまた、私どものような専門を持つ者にとっては書価の高騰に直結することになって、何とも痛し痒しではあります。が、前回にも述べた通り、近代の成熟がそれによって果たされるのであれば、そんなことは大したことではないのは勿論です。それよりも、これ迄余り顧みられなかった和本が巷に出ることによって、研究の幅が大きく広がる可能性が生じるに違いありません。

我が国の和本の量の多さは、大量で安価な和紙の生産と、凡てが手仕事で、しかも高度な造本の技術（例

えば浮世絵などに見られる色刷りの技術の精緻さなど）が、やはり大変

安価に提供され続けたこと。そして社会の下層に迄行き渡った識字率の高さ等々による所でしょう。とにかく文化的なあらゆる領域にわたって、形而上から形而下の万般が書物化され続けました。その具体的な姿については次回にその若干を垣間見たいと思います。

中野三敏 (なかの みつとし)

国文学者

一九三五年福岡市生まれ。六四年早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻修了。七二年九州大学文学部助教授、八二年同教授、九九年退職。九八年紫綬褒章受章。

巻頭エッセイ	江戸ばなし 名誉教授 中野 三敏 1	特集・六本松	さようならそしてありがとう 六本松	六本松の歴史(二)ー旧制福岡高等学校ー 大学文書館教授 折田 悦郎 3	「六本松」八十八年 名誉教授 押川 元重 6	私の原点 田島寮の精神 学生寮同窓会会長 高橋 義人 7	九州大学風景画作品集が刊行 九大祭2008 ホームカミングデー2008 9	同窓会の話題	ありあけ九大会講演会 筑後地区九大同窓会開催 10 10
インタビュー・シリーズ九大人 最高裁判所判事 櫻井 龍子 11	躍動・学生たちの活躍 □百人一首愛好会 17	インタビュー・シリーズ九大人 指揮者・第四代日本指揮者協会会長 荒谷 俊治 19	シリーズ研究・ふろんとランナー 農学研究院 教授 南石 晃明 25	伊都キャンパス施設探訪	超伝導システム科学 研究センター 29				
知の新世紀を拓く 九州大学百周年記念事業 31	九大学生が案内する世界のキャンパス □ロンドン大学 32	ニュース □九大フィル、カンボジアで演奏！ □九州大学・北海道大学合同活動報告会を開催 □USーの子どもプロジェクトが Library of the Year 2008 優秀賞を受賞 □第七回アジア学長会議が台湾大学で開催 34 34	新聞で報道された九州大学 □平成二十年十月〜十一月 35	ようこそ九州大学へ 37	九大至宝 (表紙写真説明) 38	編集後記 38			

九大 広報

Kyushu University Campus Magazine

vol.61

2009.1

編集発行 九州大学広報専門委員会

事務 九州大学総務部広報室

住所 〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

電話 092-642-2106

FAX 092-642-2113

E-mail koho@jimu.kyushu-u.ac.jp

URL http://www.kyushu-u.ac.jp

印刷 アイメディア株式会社



☐ お読みになってのご感想やご意見をお待ちしています。

☐ 投稿をお受けします。文字数は、300字未満。手書きのものも受け付けますが、できればテキストファイルのフロッピーディスク又はEメールでお送りください。可能な限り掲載しますが、本誌の目的や性格に照らして不適当と思われる原稿は掲載しません。

■九州大学関係者が本誌記事を転載する場合は、「九大広報第〇号から」と明記してください。学外の方は、事前に事務までご連絡願います。

■「九大広報」は九州大学ホームページでもお読みいただくことができます。

■次号は、2009年3月発行予定です。

特集

さようなら そして ありがとう 六本松

約九〇年にわたり多くの学生が学んだ六本松キャンパスが伊都キャンパスへの移転により、その長い歴史に幕を下ろそうとしています。今号の九大広報では、学生、教職員のみならず多くの市民の方に愛された「六本松キャンパス」を特集しました。

また、今号から、「六本松の歴史」と題し、六本松の歩みを振り返るシリーズをお届けします。

六本松の歴史（一）

旧制福岡高等学校

九州大学文学館教授 折田悦郎

福岡高等学校（旧制）、九州大学教養部等として利用された九大六本松地区は、来年度より伊都キャンパスに移転する。今回の『九大広報』の企画「さようならそしてありがとう 六本松」は、九〇年近くに及んだ六本松キャン

パスの歴史を振り返ろうとするものだが、第一回目は最初に同地区に置かれた旧制福岡高等学校（以下、福高）の歩みを見てみることにしたい。なお、本文は近刊予定の『青春群像 さようなら六本松 一九二一福高―九大二〇〇九』に



旧制福岡高等学校正門、本館 本館は九大分校・教養部の本館としても使われた（～昭和42年7月）。



東中洲を歩く福高生 昭和4年頃。

所収した拙文を、『九大広報』用に抄出したものである。この点も、初めにお断りしておきたい。

福高は、九州大学（以下、九大）自体が九州帝国大学→旧制九大（昭和二年）↓新制九大（同二四年）と大きく変化した戦後教育改革の中で、昭和二四年（一九四九）五月から一〇ヶ月間だけ、「九州大学福岡高等学校」となり、翌年三月には廃止された学

校である。つまり当初は九大とは関係の無い学校であったが、その施設・人員が引き継がれて新制九大の「第一分校」（昭和二四年）、「九州大学分校」（同三〇年）、そして「九州大学教養部」（同三八年）となり、九大の特に一般教育に大きな役割を果たして行くのである。

ところで、いわゆる旧制高校とは、その理念はともかく、実質的には帝国大学（以下、帝大）への予備教育機関（普通は三年制）であり、旧制中学と帝大を結ぶ外国語教育に力を入れた受験エリート養成機関であった。入学者は少数の男子に限られ（昭和初期を例にすれば、当時の該当年齢人口の僅か一％程度）、帝大の定員は政策的に高卒者数に合わせて設定されていたので、卒業者は選り好みをする仕組みになっていた。そのような旧制高校の淵源は、明治一九年（一八八六）の高等中学校制度にまで遡ることができる。同年、

翌年にかけて、第一（東京）から

第五（熊本）までの高等中学校が設置され、明治二七年の高等学校令により高等学校と改称されたからである。以後、明治後期に第六（岡山）、第七（鹿児島）、第八（名古屋）の学校が置かれ（いわゆるナンバーズクール）、大正中期の新高等学校令により地名等を冠した高校の増設が図られた（昭和初年には旧制高校全体で三二校）。しかし、第二次世界大戦後の学制改革により廃止となり、その多くは新制大学の教養部または文理学部等の母体となった。

福高は、このような学校として今から八八年前の大正一〇年（一九二一）十一月、勅令第四三二号をもって当時の福岡市大字鳥飼字大坪に創設されたものである。同校の設置により、それまで熊本の五高や鹿児島の高七高等、他県の高校に進学していた福岡県中学出身者は、以後必ずしも地元を離れる必要はなくなった。福高の設置にあたっては、福岡県会が創立費四二万五千円の寄付を行っているが、当時の福岡県は中学校数一九、生

徒数約一万一千六百と、学校・生徒数ともに東京府に次ぐ規模を持った教育県であり、また既に九州帝大が置かれていたこともあって（明治四四年）、官立高校の設置はむしろ当然の成り行きであった。大正一一年四月、第一回の入学試験および入学式が行われたが、志願者は文科定員一二〇名に対し五九六名、理科定員八〇名に対し四三九名、平均競争率五・二倍という難関である。入学者は履修す



寮食堂風景 昭和6年。旧制高校における「寮」は、最も基本的な教育、生活の場所であった。



運動部 昭和8年頃。運動部活動は活発であった。

る第一外国語により、文科甲類（英語）、同乙類（独語）、同丙類（仏語）、理科甲類（英語）、同乙類（独語）の五クラスに分けられた。合格者は修猷館以下、福岡、小倉、嘉穂、明善と、上位五校を福岡県立の中学校（現新制高校）が独占し、全体でも七割近くが同県中学の出身者であった。合格者を福岡県出身者が多く占めるという傾向は、基本的には福高廃止まで変わりが無い。

初代校長は秋吉音治。日本主義を信奉し、「思想問題」には勿論



野外ストーム 昭和15年頃。「あゝ玄海」は福高を代表する応援歌。

のこと、従来の高等学校に見られた生徒の自治・自由についてもかなり厳しい態度で臨んだ。大正一四年三月、第一回の卒業式が行われ、一五四名が卒業したが、勉強を旨とする秋吉校長の方針もあって、初年度の進学状況は好調であった。九州帝大の七二名を始めとして、東京四八名、京都三〇名、合計一五〇名の帝大合格者を出し、昭和四年（一九二九）には帝大入学率全国一になっている。

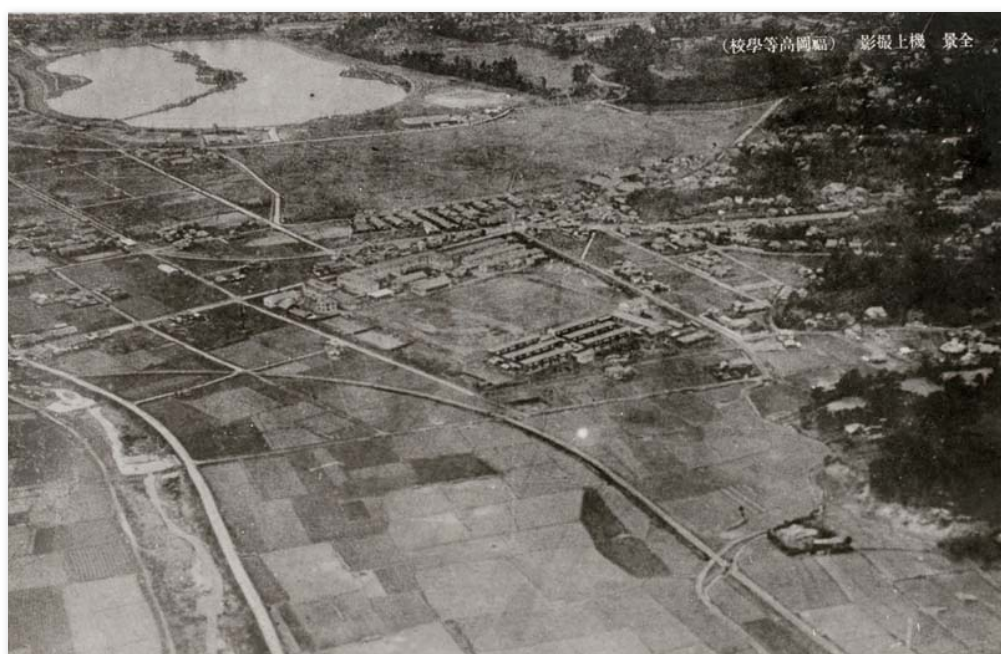
以後、福高は戦中期の繰上げ卒業・修業年限短縮（例えば、昭和一八年入学の生徒は一年短縮の二

年間で卒業）、生徒出陣、「南方特別留学生」の受け入れ等、多くの困難を乗り越え、昭和二五年の廃校までに、五〇七七名の卒業・修了者を世に送り出した。

うち九大進学二六五〇余名（五二%）、東大一三四〇余名（二六%）、京大五九〇余名（一二%）、その他四七〇余名（一〇%）である。

なお、旧制高校に付きものの寮は、名前を論語から採った「学而寮」が、現在のテニスコ

トの場所に建っていた（二階建六棟）。この寮は昭和二八年（一九五三）から順次、新制九大の田島寮に移され、昭和三十三年には移築が完了している。



全景（機上撮影） 昭和6年頃。写真中央が旧制福岡高等学校。左上に昭和4年完成の大濠公園が見える。

六本松へのメッセー

「六本松」八十八年

九州大学名誉教授 押川元重

九大卒業生のほとんどが、人生の最も貴重な時期を過ごした六本松を特別な感慨をもって思い出すのではないでしょうか。なかには苦い思い出もあることでしょう。六十年安保で社会と大学が高揚していた時期に私は学生として六本松で過ごしました。お腹を空かせながら夜を徹して友人たちと真剣に議論したことを思い出します。今から考えると恥ずかしくなるような議論もしました。知らないことは恥だという思いだけで、理解できないままに難しい本を無理して読み続けました。理学部に入学しましたので、物理学、化学、生物学、地学のすべての実験と製図を履修しました。その後、専門を数学としましたので、それらのほとんどについて何かの役立ったと言うことはできませんが、それらに少しでも

も触れることができたことは幸せだったと思います。哲学と西洋史の講義が特に強く印象に残っています。木造校舎の、それも科目ごとに特徴ある教室の姿は、学んだことの内容と関わって、あるいはそれとは無関係に記憶に残っています。

六十年代末の大学紛争が高揚した時期に、今度は教える側の立場で六本松に戻ってきました。「六本松」も緊迫した日々が続きましたが、多くの先生方が、真摯に学生に対応されましたので、不安はありませんでした。また、若者らしく真面目に対応した学生の姿が今でも思い浮かびます。そうした混乱の中での先生方との専門を越えた交流は今思い返しても得難いものがありました。八十年代に入ると教養部のあり方が改めて問題となって浮上してきま

した。その背景としては、経済の高度成長と大学の大衆化が進み、学生や教員を含めて、人々が目の目的や成果を重視するようになってきたことにあると思います。教養といったまどろっこしいものや、教養課程といった中間過程は軽視されるようになりしました。それに加えて教養部の教育研究環境の改善が放置されてきたこともあります。そうした中にあつても教養部の先生方は、教育改善を検討し、その実施に真剣に取り組みました。そこでは、複雑化し、変動が激しく、人類的課題が山積している時代だからこそ、教養が大切であるという考えが一貫していました。また、九州大学の教養教育を安定的かつ充実させながら実施していくためには、全学の教養教育を引き続き担当するとともに、独自の学生を持った「教養学部」を創設することが宿願でした。しかし、そうした宿願は実現しないままに教養部は廃止されることになりました。

教養部の廃止は教養教育を軽視するためではありませんでした。教養部廃止を折衝した相手方である当時の文部省担当官からも「九大が教養

教育を軽視するというのであるならば、教養部廃止に荷担しません」と言われたことを思い出します。その後、「二十一世紀プログラム」という形で結実した新しい教育組織を含む九州大学改革大綱案の原案を文部省に示したとき、学部学科に分かれない全学を一学部とする学部教育を逆提案されたこともあります。それらは「大学院で専門教育を、学部教育では教養教育と専門基礎教育を」という考え方に沿ったものだと思います。教養部廃止は必至の流れのなかで、九州大学は、全学教育を全学の協力のもとで実施するという方針で廃止を決定しました。

旧制福岡高等学校の創設から今日までの八十八年間にわたって、「学生と教育」を柱として機能してきた器「六本松」が無くなるに当たって、大学の最も重要な機能である学生間の交流及び教養教育が新しい器において大きく発展することを願います。

略歴

学生部長、教養部長を経て平成十五年退職。現在、放送大学特任教授、福岡学習センター所長

私の原点

田島寮の精神

九州大学学生寮同窓会会長
「一九八〇年理学部入学」

高橋義人



私が入学した一九八〇年頃の六本松キャンパスや田島寮は、とてもよい雰囲気にもまれていた。大学はアカデミックで自由な気風があり、自分にあつた学生生活を送ることができた。当時の田島寮には本音でつきあえる多くの友と、先輩方が残された寮自治会という完成された組織があつた。寮祭などの行事の企画運営や会計管理、日々の生活管理までのほとんどすべてを自らの手で行つてきた。私はこの田島寮で寮長をさせ

ていただくことができ、多くのことを学ばせていただいた。きちんとした理想を持ち、民主的な手続きを経た上で、その理想に近づく努力を続けていけば、人は協力してくれることを知った。多くの寮友とも本気でつきあつた。寮自治の難しい問題や日々の悩み、自分が生きる目的についてまで、夜通し語り合つたこともあつた。時には激論もしたが、寮祭では一つになることができた。第二十五回の記念寮祭では、樽神輿に加

えて、歌手の河島英五さんを招いて盛り上がり、フィナーレでは樋井川に飛び込んだ寮友もいた。昨年夏、最後の田島寮祭には全国から仲間が集まり、熱い思いを共有した。今年、三月には閉寮式典を行う予定である。もう一度、みんなで寮歌を歌い、静かに田島寮の最後を見守りたいと考えている。田島寮の歴史は幕を閉じて、我々の心の中には田島寮の精神はずっと生き続けていくことと思う。



第25回九州大学田島寮祭（別府橋付近）

こんな本
出しました

九州大学風景画 作品集が刊行

問い合わせ先：出版事務局
TEL 092-674-1233 FAX 092-674-1235



十一月二十二日開催のホームカミングデーでも展示し、ご来場の多くの方にご覧いただいた吉川幸作さんの風景画作品集がこのたび刊行されました。この作品集には、吉川さんが長い年月をかけて描いた箱崎キャンパスや、六本松キャンパスなどの墨彩画が約六十点収められています。吉川さんからは刊行にあたり、「この度、数々の歴史と学問の業績を宿しながら消えゆく運命にある箱崎キャンパスや六本松キャンパス、九大医学部の建物や風景を一冊の画集にまとめて出版する運びとなりました。九州大学で学び青春を過ごされた卒業生の皆様の追憶のひとときのお役に立てれば幸いです。」とのコメントをいただきました。

Final Pleasure 六本松



実行委員の深川さん

本年度のテーマ「Final Pleasure 六本松」。Pleasureという言葉には、「喜び・楽しさ・満足」といった意味がありますが、このテーマには、本年度の九大祭を六本松キャンパスとの別れにふさわしい、活気のあるものになりたいという願いが込められています。規模が大きくキャンパスも分散している九大で、これだけの人が集まって行うイベントは他にありません。

実行委員の深川拓朗さん（工学部三年）は「六本松キャンパスがなくなることは非常にさみしいです。交通の便もよく、定食屋も多く学生の街という感じで親しみがありました。今回六本松最後の学園祭となるのですが、お客さん・地域の人々・学生関係なく、九大祭を陰で支えている人々を見てほしいです。」と語っていました。

硬式野球部



硬式野球部の1年生です。九大祭は、思っていたより露店も多くて大規模ですね。ラオスは禁酒なんて関係なく盛り上がっていますよ。

RICK



日本の子どもたちに世界のことをもっと知ってもらおうと、マダガスカル遊びなどを教え、コミュニケーションの大切さを伝える活動をしています。

ECO-A



九大祭のゴミの分別・回収に取り組んでいます。禁酒とあっても、例年に比べ瓶が少ないのと、酔っぱらいもいないのでコミュニケーションが取りやすいですね。

鉄道研究会



鉄道やバスが好きな部員の集まりです。今日は鉄道模型を公開しています。六本松がなくなるのは、一抹の寂しさがあります。

コールアカデミー



禁酒でもパイ投げで九大祭を盛り上げていきます。合唱団の活動については、定期演奏会もやっていますので、是非ご来場ください。

FORCELESS



男女混合のフットサルチームです。校舎の紅葉はきれいだし、歴史を感じる建物ばかりなので、六本松が移転してしまうのは、大変名残惜しいです。

九大祭2008

Final Pleasure 六本松

毎年多くの人で賑わう「九大祭」。今年のテーマは「Final Pleasure 六本松」。そんなPleasureに溢れた六本松での最後の開催となる九大祭を取材してきました。

今回で六十一回目となる九大祭。九大祭の特徴の一つはグラウンドに所狭しと集まる模擬店。さまざまなサークルの学生がオープンする模擬店や教室展示の一部にお邪魔しました。

当日の模擬店の数はなんと約百四十店。教室展示も三十カ所もあり、各サークルが趣向を凝らした模擬店や展示では、学生教職員のみならず毎年九大祭を楽しむにしている多くの市民の方で賑わいました。

秋の六本松の風物詩として長年愛された九大祭の開催が今年で最後となることから、会場を訪れた皆さんからは九大祭を楽しむ多くの笑顔が見られた一方、六本松が移転することについて寂しいとの声も数多く聞かれました。



夜のグラウンド一面に広がる模擬店群。この風景も今回で最後。（写真提供：九大祭実行委員会）

ホームカミングデー2008

さようならそして ありがとう 六本松

秋空の下、多くの同窓生が集まる

十一月二十二日（土）晴天の秋空の下、今年で三回目の開催となる「ホームカミングデー2008」が六本松キャンパスで開催されました。当日は九大祭の期間でもあり、六本松キャンパスは多くの学生や市民の皆さんで賑わいを見せていました。六本松キャンパスでの最後のホームカミングデーの開催となることから、これまでで最も多い同窓生の皆さんが参加されました。



歓迎会では、有川総長の挨拶、来賓代表の梶山前総長の挨拶、在校生代表の水本聡さん（工学部三年・第六十一回九大祭実行委員会実行委員長）の挨拶が行われ、引き続き、小田胃腸科院長の小田徹也様（昭和二十年医学部卒）の乾杯の発声で懇談会がスタートしました。

懇親会に参加された東映株式会社相談役の高岩淡さん（昭和二十九年経済学部卒）は「六本松ではキャンパス内で焚き火をしたり、破天荒の学生時代を送りました、当時の大学は放任主義でしたが、皆で助け合い、家族みたいにつき合っていました。自分の人生で最も楽しい時期でもありました。」と、また、小田徹也さんは「六本松ではよく寮に遊びに行き、仲間というんなこと語り合ったものです。当時の学生は、互いに相手の心の中まで入り込み、助け合って生活していました。」といった思い出を語っていただきました。

平成二十年十一月二十二日（土）、ホームカミングデー2008が開催されました。今回、六本松での最後の開催となり、多くの同窓生の皆さんが集まったホームカミングデーの模様についてレポートします。

懐かしのメニュー、思い出の写真展、キャンパスツアー



れ、多くの人が訪れました。

懇親会では、このほかにも、同窓生・現役の新旧九大生によるマンドリンクラブの演奏や応援団から卒業生へのエールも行われ、大いに盛り上がりしました。会は参加者全員による学生歌「松原に」の合唱で幕を閉じましたが、参加された同窓生の皆さんからは、移転するキャンパスを懐かしむ声とともに、活気溢れる現役の学生に対し、多くの激励のメッセージがありました。

懇親会会場では一日限りの懐かしの学食メニューが復活し、皆さんの人気を集めました。メニューは「トンカツーフ」や今も学生に人気の「ジロー風スパゲティ」など五種類。懐かしい味に当時の思い出が蘇り、会場で多くの思い出話で盛り上がりました。別会場では、六本松キャンパスをはじめとした懐かしの写真展や吉川幸作氏による墨彩画展も開催されました。午後からは、大学文書館折田教授による講演会「六本松キャンパスの歴史」も開催さ

また、今日の午前中には、伊都キャンパスの見学ツアーが開催され、参加者は、過去から未来へと続く、九州大学の現在を体験されていました。



同窓会 の 話 題

平成二十年ありあけ九大会講演会を開催

平成二十年十一月八日(土)午後六時、ありあけ九大会(泉博士会長)の講演会が、総会に続いて開かれました。会員一同、三池炭鉱の育ての親といわれ、三池港の築港に貢献した團琢磨と、大牟田の近代化遺産への思いを深めました。

本会は、大牟田・荒尾を中心に、平成九年九月、学部の垣根を越えた地域同窓会の草分け的存在として設立され、今回は十二回目の開催、大学本部から落合副学長、市山社会連携課長の出席をいただき、大学の現状と目前にせまった百周年記念事業のご報告をいただきました。

講演では山田元樹氏(大牟田市市民協働推進室長、昭和六十年文卒)による国指定重要文化財史跡の宮原坑と万田坑を含む「九州山口の近代化遺産群―非西洋化世界における近代化の先駆」の世界遺産登録への期待や地元の街並みに触れ、團の業績や自己の独自調査で分かった旧居など三池での暮らしぶり、人柄も紹介しました。その後の懇親会では、ミニコンサートを聞きつつ、大学と会員の親睦を深めました。ありあけ九大会は、総会後の講演が恒例の「目だま」で、杉岡九大元総長、稗田元福岡県副知事、櫻井元労働女性局長(今年最高裁判事)、梶山九大前総長、森山福岡県教育長、海老井福岡県副知事と毎年の講演を楽しみにしています。来年は是非、有川新総長にお願いしたいと熱望しているところです。

ありあけ九大会 事務局代表幹事

鬼塚賢慈(昭和四十四年法学部卒)



平成20年度 筑後地区九州大学同窓会



会員と和やかに懇談される有川総長

平成二十年度筑後地区九大同窓会を開催

平成二十年十一月二十一日(金)、筑後地区九大同窓会が久留米市・ブリヂストンクラブで開催されました。出席者は会員七十八名、来賓として大学本部から有川総長、渡邊総務部長、ありあけ九大会から泉会長、鬼塚事務局代表幹事に出席いただきました。

野田会長(昭和二十五年経済卒)が大学当局のご支援と会員各位のご協力に感謝を述べるとともに、筑後地区九大同窓会がますます活発になるよう頑張りたいと挨拶されました。ありあけ九大会の泉会長からは活動についてのご報告とご祝辞をいただきました。

引き続き有川総長より大学の改革の状況、新キャンパスへの移転の状況、百周年記念事業への協力依頼、厳しい大学運営のご苦労などのご報告がありました。泉信也参議院議員(昭和三十七年工卒)からは、九州大学の発展と皆様の更なる活躍を祈りますとの祝電をいただきました。

筑後地区九大同窓会では元久留米市長の谷口久さん(前会長、昭和十六年法文卒)のほか現職のみやま市長の西原親さん(昭和三十六年経済卒)、久留米市長の江藤守國さん(昭和三十九年経済卒)、大川市長の植木光治さん(昭和四十八年農卒)が活躍されています。当日はそれぞれがステージの上から抱負や市が抱える問題点などを率直に語られました。会場のあちこちで賑やかな交流が行われ、時が経つのを忘れるほどでしたが、前会長の谷口久さんによる万歳三唱のご発声により、盛会のうち無事閉会することが出来ました。来年度はさらに発展するよう幹事一同頑張りたいと思っています。

筑後地区九大同窓会副会長

福田洋一(昭和三十三年経済学部卒)



最高裁判所判事

櫻井 龍子

さくらい
りゅうこ

平成二十年九月十一日、本学法学部卒業の櫻井龍子さんが、最高裁判所判事に任命されました。十五人の最高裁判所判事の中で唯一の女性、初の戦後生まれの判事です。櫻井さんは、本学を卒業後、労働省（現厚生労働省）や内閣府など、数々の行政の現場で活躍され、平成十六年からは、本学の経営協議会委員もお務めいただきました。偉大な先輩に、現役法学部学生の中馬祥子さんが、学生時代の思い出も含めてお話を伺いました。

聞き手

中馬 祥子

（ちゅうま さん・さちこ）
法学部三年



櫻井龍子氏のプロフィール

昭和二十二年 福岡県大牟田市で出生
昭和四十年 県立大牟田北高等学校卒業
昭和四十四年 九州大学法学部卒業
昭和四十五年 労働省入省、婦人局婦人福祉課長、勤労者福祉部企画課長、大阪府生活文化部長、労働省勤労者福祉部長、官房審議官などを経て、平成十年 労働省女性局長に就任、平成十三年退官
その後、内閣府情報公開審査会委員（平成十三～十六年）、九州大学経営協議会委員（平成十六年から）、大阪大学大学院法学研究科招へい教授、早稲田大学大学院公共経営研究科講師、九州大学法学部客員教授などを歴任し、平成二十年九月に最高裁判所判事に就任

若い頃に勉強したことは将来どこかで必ず役に立つ

学園紛争の中で過ごした 学生時代

— 学生時代のことからお伺いします。一、二年生の頃はマンドリンに熱中され、その後は司法試験に向けて猛勉強されたそうですね。
櫻井 そうですね。大学に入ったら何か音楽がやりたいなと思っていましたので、マンドリンクラブに入部しました。マンドリンクラブには、いろんな学部部の部員がいて、全学の方と幅広いお付き合いができました。本当に楽しくて、二年生までは授業よりマンドリンを弾いている時間の方が長かったくらいです。でもさすがに三年生になると、大学は学問の府であることにハタと気付きました（笑）。そこで、具体的な目標があった方が励みになるということもあって、司法試験に向けた勉強を始めたというわけです。当時は学園紛争が激しかった頃で、授業そのものが中止になることも多くて、よく図

書館に通って仲間と一緒に勉強していました。

— 米軍のファントムが墜落したのもこの頃ですね。

櫻井 そうです。建設中の大型計算機センターに墜落したのが夜中でしたので、翌朝現場に行ってみると、センターの端にファントムがポンと引っかかっていたのです。もしも授業を受けている最中だったらとんでもないことだと思いましたね。それから、当時の板付基地まで自然発生的に基地反対のデモができて、私も初めてデモというものに参加しました。九大を出発して当時の板付基地の北の端までだったかな。そこに皆で座り込んで、米軍機めがけて「はんたいい！」と叫んだわ

けです。当時はデモとか学生集会とか、そういうことが本当に日常の風景でした。今とは全然違いますよね。それだけ社会が変わった

ということでしょう。

— ご卒業後は行政官としての道を歩まれることになりましたが、司法試験への再チャレンジは考えにはならなかったのでしょうか。
櫻井 残念ながら司法試験に合格とはいきませんでした。何が何



1965年（S40年）7月 太平村青年訓練所でのマンドリンクラブ合宿（中央が櫻井さん）



1967年（S42年）初夏 工学部本館をバックにした櫻井さん



1969年（S44年）1月 三畏閣での民法原島ゼミのコンパ（前列左から三人目が櫻井さん）



でも法曹界に入らなければなら
ないと考えていたわけではありませ
ん。「何か社会の役に立つ仕事が
したい」という思いは強かったの
で、公務員試験に合格し、労働省
にお世話になることにしました。
入省した時点で、もう気持ちは切
り替わっていましたね。それにし
ても、後になって司法界の仕事に
携わることとなるとは思ってもし
ませんでした。学生時代の勉強が
今になって役立つことになったの
は大変有り難いことです。人間、

目の前の仕事に真っ直ぐに 取り組んだ労働省時代

― 入省された頃は、今のよう
な「男女雇用機会均等」や「男女共
同参画」とは程遠い時代だったと

若い頃に勉強したことは将来ど
かで必ず役に立つものですね。今
回の私のようにダイレクトにとい
うケースは珍しいかもしれませんが
が、誰しも気付かないうちにどこ
かで役に立っているはずだと思う
のです。

と思いますが、いろいろとご苦労も
あったのではないのでしょうか。

櫻井 私が入省したのが一九七〇
年で、男女雇用機会均等法の施行
が一九八六年です。入省当時、欧
米ではウーマンリブ運動が盛り上
がっていても、日本はまだそうい
う状況にはありませんでした。私
が入省して最初にやったことはお
茶汲みでございます（笑）。三十
人か四十人くらいの部署で、それ
まで女性が一人しかいなかったこ
ともあり、私もそれほどお茶汲み
には抵抗はありませんでした。そ
れよりも苦しかったのは、将来自
分がどんなポストに就けるのか
が見えなかったことです。男性と
同じ階段を登っていけるという保証
がない時代でした。先輩である森
山眞弓さん、赤松良子さん、高橋
久子さんらとよくお昼をご一緒さ
せていただいたのですが、その
時に「女性は男性の二倍、三倍仕
事をしないと認められませんよ」
と言われたものです。そういう時
代だったのです。今と比べると隔
世の感があります。

― 労働省でのお仕事で最も印象
に残っていることは何でしょうか。

櫻井 やはり育児休業法という法
律を作ったことです。現在は、介
護休業も一緒になって、育児・介
護休業法となっていますが、この
法律は、最初に育児休業法として
一九九一年の国会で成立しました。
十七条しかない小さな法律でした
が、子育てのために一年間休業で
きるという素晴らしい権利を男性
にも女性にも与えることができた
点で画期的な法律です。経営者団
体の反対があったり、国会内での
調整があったりで、精神的にも肉
体的にもハードな仕事でしたが、
当時の私は四十代前半で、体力も
十分で脂が乗り切っていたという
意味でも印象に残る仕事です。施
行から十五年ほど経ち、今、育児
休業を取って子育てをされている
方々が三十万人とも四十万人とも
言われていますが、親御さんや育
てられている子供達が、私にとっ
ては子供か孫みたいだと思えて嬉
しくなります。良い仕事ができたと
な、労働省に入ってよかったなと

本当に思いますね。

― 労働省をご退官後、九州大学の経営協議会委員として、母校の運営について貴重なご意見をいただいたと伺っています。委員として見てこられた九州大学の運営についての感想をお願いします。

櫻井 二〇〇四年四月から、判事に就任する二〇〇八年九月まで、ずっと委員をさせていただき、皆さんの耳に痛いことも言わせていただきました（笑）。四年間やってみて、学外者だから分かること、言えることがあるのだというのが実感です。総じて申し上げれば、梶山前総長のリーダーシップの下、九州大学は法人化のメリットを活用して活性化してきたのではないかと思います。他の大学では、経営協議会がある意味ではお飾り的なところもあると伺っておりますが、その点九州大学では、経営協議会も相当頻繁に開いていたので、学外委員である私達も発言の場をたくさんいただきました。また、その意見を大学の運営に反映していただき、九州大学

は経営協議会がかなりうまくいった例ではないかと思っています。これから必要なことがありましたら、いつでもアドバイスをしたいと思いますし、有川新総長にも大いに期待しています。

最高裁判所判事として

― そして今年の九月には、最高裁判所の判事に就任になられました。おそらくこれまでいろいろな方から同じ質問を受けてこられたと思いますが、司法界にお入りになられることとなった時の心境はいかがでしたでしょうか。

櫻井 最高裁の判事というのは大変大きな重責を担うポストですから、まず率直に「私にできるかしら」という心配が頭に浮かびました。けれども、行政から、しかも女性が務めなければならぬポストだという要請でし、し、「頑張れば何とかやれるかな」と思い切った。飛び込んだという感じです。

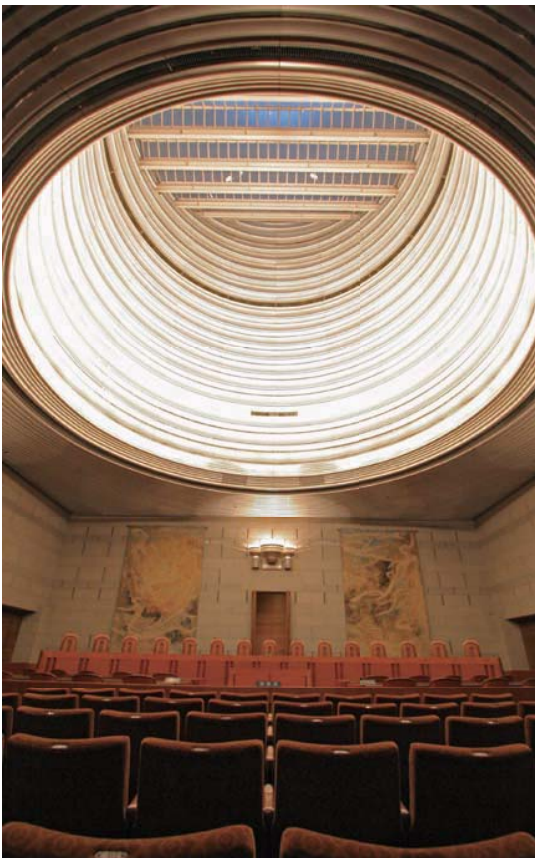
― 裁判員制度のスタートが目前に迫っています。裁判員になる可能性のあるという通知を受け取っ

た方には消極的な反応も見られるようですが。

櫻井 裁判員という形で司法に参加いただく国民の皆様は、ある意味で私と似たような立場かもしれませんね。日本の場合、裁判は裁判官、弁護士、検察官といった高度に専門的な能力、知識のある人たちが行うものだという認識があって、国民と裁判の間には距離感があるのは事実です。ところが、アメリカでは映画などでご存知のように陪審員制度がありますし、ドイツなどでは参審制度といって国民が裁判に参加する制度があり、

いずれも長い間定着しています。

日本で裁判員制度というのと、どんなでもないことが始まるのではないかとお思いの方が多いようですが、むしろ、やっとならこれらの国々に近づくとおっしゃると思います。国民の皆様には、プロの眼だけで結論を出すのではなく、自分達も司法に参加するんだという意識を持っています。民主主義国家として、日本の国民は投票という形で立法に参加し、国民から選ばれた国会議員の中から行政のトップである総



東京都千代田区の最高裁判所大法廷



理大臣が選ばれるという中で、司法だけは国民が参加するという仕組みがなかったのです。国民一人一人が責任をもって作っていくのが民主主義国家ですから、司法にも国民が参加して初めて立法、行政、司法三権がそれぞれ民主的な制度になったと言えるのではないのでしょうか。

―― 将来の法曹人口のあり方につ

いて、法科大学院の数も含めて議論がなされています。この問題についてはどのような感想をお持ちでしょうか。

櫻井 今、日本の社会全体が事前規制から事後チェック型へと転換しつつあります。そういう中で司法の果たす役割は重要になってきており、司法を支える法曹人口は増やさなければならぬというのが、何年も議論されて出された結論です。教育の方法については法科大学院が良いということで走り出しているわけですが、制度というものは事前に考えていたものと違う結果が出たりすることは有り得ることです。走り出しながら足りない部分や不都合な部分を、また皆で修正していけばいいのではないかと思っています。既に、法学、文部科学省、法務省、最高裁などの関係者が集まって議論が始まっていて、課題が出てきています。それを踏まえてさらに良いものにしていくという動きも見えています。

―― 私の周りにも法曹界を目指し、

頑張っている友人が多数います。彼ら、彼女らに対して望まれることは何でしょうか。

櫻井 法曹界に入るにしても、他の分野で仕事をするにしても、知識だけあれば良いというものではありません。求められているのは、コミュニケーション能力を始め、人間としての基礎的な能力を身に付けていることです。そのためにも、大学生活においては、専門の勉強だけでなく、広く自分の人間性を高めるような勉強をしていたいただきたいと思います。また、私がマンドリンに熱中したように（笑）、いろいろな経験をすることも必要なのではないでしょうか。

―― 最高裁の判事ともなれば、その重責に加えて、周囲からの注目度も非常に高くて、毎日が緊張の連続だと思えます。気分転換などにはどのようななさっているのでしょうか。

櫻井 週一回、陶芸教室に通って土をこね回しています。子供に戻ったような気分でお茶碗なんかを作っていますよ。それから、冬に



櫻井さんが気分転換を兼ねて通う、陶芸教室でつくられた陶器

なるとスキーです。陶芸は十年ちよつと、スキーは三十年くらいやっていますが、なかなか上手になりません（笑）。

―― 来春、移転により、多くの卒業生が学ばれた六本松キャンパスがなくなることとなります。

櫻井 私も入学後一年半を六本松で過ごしました。六本松にはクラブの部室もありましたし、田島寮では毎月のようにパーティーがあって、女性が希少でしたからダンスパーティーの時などは引っ張りだこでした（笑）。白菜と安い牛

自分の力を信じ、
日本の将来を考えながら
勉学に励んでほしい。

肉を買ってきて、洗面器みたいな鍋で作った焼きも思い出しますね。本当にこのキャンパスには思い出が一杯です。寂しいなというのが正直な感想です。けれども、二〇〇六年のホームカミングデーで学生食堂のカレーをいただき、

懐かしい味とともに思い出は心の中にしっかりと刻み込みました。これからは、伊都キャンパスで新たな九大の歴史を築いていってほしいと思います。大学は、学生と教職員が一緒になって作っていくところです。新しい場所に移

って、また新たな学問の府を作っていけるということは、素晴らしいことではないかと思えますよ。
――最後に、あらためて学生、教職員にメッセージをお願いします。
櫻井 新しい総長、新しいキャンパスと、新しいことづくめの九州

大学ですから、その新しさを活用して、さらに良い大学にしていってほしいというのが卒業生としてのお願いです。新総長も多くの課題を抱えて大変だとは思いますが、教職員の皆様が一丸となって支えていただき、梶山時代に続く有川時代を作っていただきたいですね。いろいろな意味で日本社会は今、大きな曲がり角に立っています。学生の皆さんには、自分達の力を信じて、日本をどういう方向にもっていくべきかを考えながら勉学に励んでほしいと思います。特に、九州という枠にはまることなく、アジアをはじめとして世界という大きなスケールで物事を見つめることができる人になってほしいと思います。また、そんな人材を育てていく九州大学であってほしいと願っています。

このインタビューは、二〇〇八年十二月五日、東京都千代田区の最高裁判所櫻井裁判官室で行われました。

シリーズ九大人
インタビュー

躍動

学生たちの活躍

「躍動―学生たちの活躍―」では、サークル活動など学生たちの活動にスポットライトを当てて、紹介していきます。

今回紹介するのは、競技かるたを楽しむ学生たちが集つたサークル「百人一首愛好会」です。

百人一首愛好会



百人一首愛好会とは

百人一首愛好会は、「百人一首を文学的に楽しむ」を目的の一つとして一九七八年に発足したサークルで、現在は学部生・院生のメンバー二十名が「競技かるた」を中心に活動しています。メンバーは「小学生の頃から」、「大学生になってから」と競技かるたを始めた時期も様々ですが、関東や関西、九州地区などで行われる大きな大会での優勝や、県代表としても活躍しています。

昨年は創立三十周年の節目を迎え、記念品の制作、記念誌の発行、記念祝賀会などが行われました。

競技かるたとは

競技かるたは、小倉百人一首かるたを用いて、相対座する二人の競技者で行われます。百枚の取札から各自持札として二十五枚の札を選び、読み手が読み上げる札を取り合い、取りやお手つきなどの判定は競技者間で行われ、早く持札が無くなった者が勝者となります。

競技開始時に場にある札は五十枚ですが、読み手が読み上げる札は百枚あるため、初心者の上の句と下の句を覚えることからまず始めます。

「大学で始めたばかりの初心者には、歴代の先輩から伝わる句をゴロで覚えるコツを伝授します。句を覚える

と上の句の最初の一字で取れる札が七枚、二文字で取れる札が四十二枚あります。」と、愛好会の前会長長尾嘉昭さん（農学部三年生）が教えてくださいました。

畳の上の格闘技

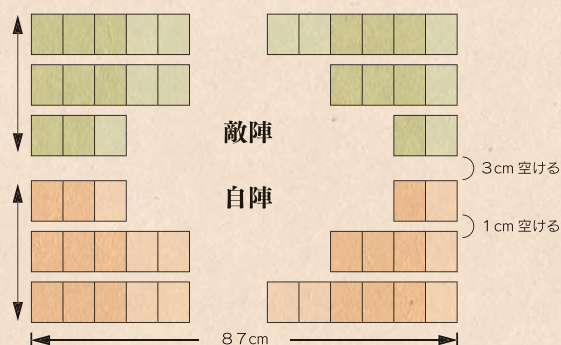
試合は、自分の方に向けて選んだ持札二十五枚を上中下段に自由に並べることから始まり、この札の並べ方も勝つための重要なポイントの一つです。持札を並べ終わると十五分間の暗記時間となり、自陣と敵陣の札の配置を覚えます。「自陣だけ覚えればいいのか？」と思いがちですが、敵陣の札を取ることに





東箱崎小学校と箱崎中学校の子どもたちのかるた教室を指導

競技かるたのルール



※ 矢印の範囲内が「競技線内」

て自陣の札から任意の一枚を敵陣に送ることができ、相手より早く札を無くすることができ、敵陣の札の配置も覚える必要があるわけです。暗記時間の最後には「素振り」と呼ばれる札を取る動作を繰り返し、効果的な札の取り方を体に覚え込ませます。

暗記時間が終わると試合開始ですが、最初に序歌と呼ばれる百人一首には含まれない歌が詠まれます。続いて下の句だけが繰り返し詠まれ、一秒おいて一首目の上の句だけが読まれ、互いに精神を集中させての札の取り合いとなります。個人戦は段位によってクラスが分かれ、団体戦は段位に関係なくメンバーを組んで試合ができます。段位は、公式大会での成績等によって上がっていきます。

「競技かるた」は、華やかなイメージとは裏腹に、札を取る手と手がぶつかり合うなどその動きの激しさから「畳の上の格闘技」と呼ばれています。

活動スケジュール

愛好会は、火曜日と土曜日は箱崎で、水曜日は六本松で活動し、四時間半ほど練習しています。競技かる

たの試合は、一試合一時間以上掛かることもあり、メンバー内で練習試合をすれば、その分練習時間も長くなります。練習にはOB・OGのほか、一般の方も参加しており、「自分も同じように卒業しても機会があれば一緒に練習したいですね」と長尾さんが嬉しそうに話してくれました。学外の団体との交流も盛んで、市内の筑紫女学園高等学校や大濠高等学校、福岡大学などと一緒に練習しています。

他にはこんなことも

愛好会に所属している学生は、市内の公民館で行われているかるた教室などへの訪問指導も行っています。東箱崎公民館で行われている東箱崎小学校と箱崎中学校の子どもたちのかるた教室は、愛好会OGの山中美沙さん（教育学部卒）が卒業論文の研究対象として同公民館を訪れたことがきっかけとなって始まり、現在も山中さんが講師を務め、学生も一緒にかるた指導をしています。

その他、愛好会のOB・OGは、故郷や就職地へ「競技かるた」を持ち帰り、奈良、熊本、宮崎、鹿児島など多くの土地で「競技かるた」の普及に勤めています。

百人一首愛好会前会長 長尾嘉昭さんへの インタビュー

Q…競技かるたの魅力は？

A…句を覚え、素早く札を取れるだけでなく、相手との駆け引きや、チームでの協力が楽しめたりと奥が深いところです。

Q…競技かるたを始めてよかったと思うところは？

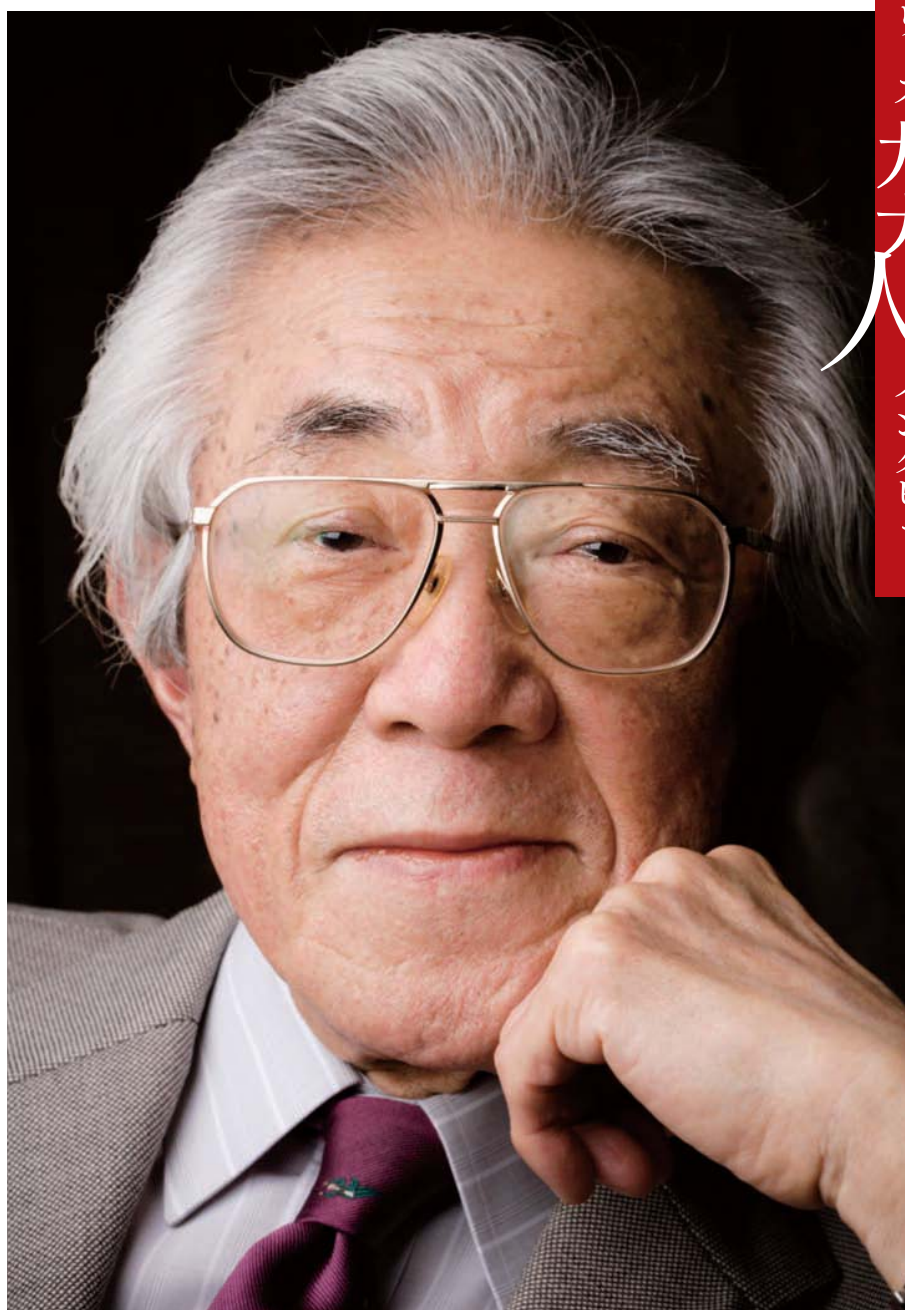
A…集中力がつき、気持ちの切替がうまくできるようになったことでしょうか。また地域や年代を問わず様々な方と知り合うことができ、社交性が身に付きましたね。それから、ランプゲームの「豚のしっぽ」では負けることはないですね（笑）。

Q…将来の目標は？

A…これまで沢山の先輩方にお世話になりましたので、私も何らかの形で後輩や愛好会に携わっていきたいと思います。

Q…最後にメッセージをどうぞ。

A…競技かるたは、かるた以外に特に道具を揃える必要はありません。OB・OGとの交流も盛んで視野も広がりますので、是非練習に足を運んでみてください。



荒谷俊治

指揮者・第四代日本指揮者協会会長

あらたに
しゅんじ

六本松キャンパスがその長い歴史に幕を閉じようとしている中で、旧制福岡高等学校、九州大学に在学され、九大コルアカデミーの創設者であり、九州大学の学生歌「春の讃歌」の作曲者でもある荒谷俊治さん。現役の指揮者としての活動を通じて、今もなお九州大学に暖い眼差しを向けてくださる大先輩の荒谷さんに、現役九大フィルのインスペクター（※）である文学部三年生の相原七月さんがお話を伺いました。

荒谷俊治氏の略歴

昭和五年生まれ
昭和二十八年 九州大学法学部卒業
昭和三十年 九州大学文学部卒業
昭和三十四年 東京放送合唱団を指揮してデビュー
昭和四十三年 東京フィルハーモニー交響楽団指揮者
昭和四十四年 文化庁派遣在外芸術研修員としてアメリカに留学、世界的指揮者であるジョージ・セル氏に師事
昭和四十九年 名古屋フィルハーモニー交響楽団常任指揮者
平成十五年 第四代日本指揮者協会会長
海外演奏は、アメリカ、ドイツ、ロシアほか多数。現在はフリーで各地のオーケストラ、合唱団を指揮し、在住する町田市では町田フィルハーモニー交響楽団の音楽監督も務める。

聞き手

相原 七月

（あいはら・なつき）

文学部人文学科三年・
九大フィルインスペクター

（※）インスペクター

楽団全体を取り仕切り、その運営をスムーズに行うための役割を担うマネージャー的存在。



文化も学問も長い時間をかけて作られていくもの

バレーボールに熱中した 旧制福岡時代

― お生まれは広島だと伺っておりますが、福岡においてになったいきさつからお願いします。

荒谷 父の転勤の関係ですね。父は役人でした。役人とはいってもちよつと特殊な仕事でしてね、馬専門の獣医でした。戦時中は軍馬の面倒を見ていて、戦後は競走馬の選定などであちこちへ転勤していました。私が生まれてからも、



旧制福岡時代、池上煌君と（右が荒谷さん）

広島から三重、そして福岡へと移りました。私は三重には付いて行かなかったのですが、福岡へは家族で移ってきたというわけです。私が小学校四年生の夏休みでしたね。それからは福岡県中学修猷館、旧制福岡高等学校（以下それぞれ「修猷館」、「旧制福岡」と表記）、そして九州大学とずっと福岡で過ごすこととなりました。

― 修猷館や旧制福岡での思い出といったら何でしょうか。

荒谷 修猷館にいた頃は戦後間もない頃で、米軍の指示で柔道や剣道が禁止されていました。そこで何か熱中できるものがないかなと思って始めたのがバレーボールです。ところがこれにすっからはまってしまいました。旧制福岡に入ってから同じです。当時の旧制福岡はスポーツが盛んで、バレー部も強かったのですが、私は、入学が決まってすぐからバレー部の合宿に引っぱり出され、それから

というものの徹底的に鍛えられました。その甲斐もあつてか最後の旧制高校の全国大会では優勝したんですよ。その時の優勝旗は今でも九大のどこかにあると思います。ところが、九大に入ってからバレーはやっていません。後の師匠である石丸寛（※）さんから、「バレーか音楽かどちらかにしろ」と言われたのです。

― 移転の関係で、今年で六本松キャンパスがなくなってしまうますが、荒谷先生にとって六本松にまつわる思い出って何でしょうか。

荒谷 私は、旧制福岡時代を含めて約三年間六本松で過ごしたわけですから、九大の中では最も思い入れの深い場所ですし、キャンパスがなくなるのは淋しいですよ。六本松ではバレーボール漬けでしたね。合宿もやって、その時は指導してくださった先生が肉や魚を手に入れて、部員に食べさせてくださったのを覚えています。

そして音楽の世界へ

― 九大に入られてからは、九大フィルで本格的な音楽活動をなされたわけですね。当時の九大フィルはどのような雰囲気だったのでしょうか。

荒谷 昔の九大フィルには、貴重な楽器や楽譜が数多くありまして、東京の著名な音楽家がわざわざ楽譜を写しに來ていたほどでした。けれども私が入った頃は、九大の学生だけではオーケストラが編成できない状態でした。特に弦楽器は九大外の方がかなりメンバーに入っていましたね。いわば市民オーケストラの走りのような感じでした。

― 九大フィルの時代には、演奏旅行で感動的な体験をされたそうですね。

荒谷 宮崎での演奏旅行のことです。

（※）石丸 寛（一九二二―一九九八）指揮者。戦後福岡で音楽活動を行い、一九五三年に九州交響楽団を創設。初代常任指揮者を務めた。その後全国の交響楽団を指揮する一方、テレビの音楽番組「題名のない音楽会」の司会者を務めるなどクラシック音楽の普及にも尽力した。一九九五年からは九州交響楽団の音楽監督も務めた。

すね。この時、視覚や聴覚に障がいのある子供達が集まった学校で演奏を行いました。最初に序曲をやったんですが、会場がざわついていましてね、演奏者としては普通なら気分を害するところなんです、よくよく聴いていると、子供達は雑談で騒いでいるんじゃないんですね。音が出るとざわざわ、音が変わるとざわざわという感じなんです。曲の合間に学校の先生



らしき女性が私のところにやってきて「すみません。この子供達は感激してざわついていいます。目が見え、耳も聞こえず、しゃべることもできない子もいます。どうか勘弁してやってください」とおっしゃるのです。私は、子供達がどうやって音楽を感じているんだろうと思いました。どうやら、彼らは肌や、床から伝わってくる振動などを通じて音を感じているらしいのです。次の曲の演奏の前に、私は楽団員にこのことを伝えましたら、楽団員は涙を流し始めました。皆多感な時期の学生でしょう、おしまいにはボロボロと涙を流しながら演奏しているわけですよ。演奏会が終了して子供達が会場を後にする時になると、眼の见えない、耳の聞こえない子供達がオーケストラの気配のする方向に身体を向けて、まるで後ろ髪引かれるように会場を出て行くのです。私は子供達が皆会場を後にするまで、涙しながら演奏し見送りました。その時に本当に音楽の力ってすごいなと感じました

よ。私だけではなく、楽団員全員にとつて忘れられない体験でした。
―― 学生時代には合唱もやっておられたのですね。

荒谷 当時の福岡には、修猷館や旧制福岡の先輩達が結成した混声合唱団と、西南学院のグリークラブを母体とした合唱団が合併して、福岡合唱協会が生まれ、誘われて私も入っていました。そんな折、九大にも男声合唱団が欲しいという声が高まり、「この指とまれ」という感じで私が言い出して、九大コールアカデミーを立ち上げたのです。昭和二十八年のことです。その頃はもちろん九大フィルもやっていましたから、それからはいくつかオーケストラとコーラスとで毎日音楽漬けでしたね。

―― 作曲も手掛けられたと伺いました。九大の学生歌である「春の讃歌」ができた時のエピソードなども教えてください。

荒谷 作曲といってもシンフォニーなんかはできませんよ（笑）。ただ歌は昔から好きでしたし、幼稚園の園歌や校歌、それから学生



1953年（S28年）九大卒業の年、指揮者石丸寛先生（右端）と同年工学部卒の親友であり作曲家でもある藤井凡氏（中央）の3名で。（左端が荒谷さん）

歌などは頼まれてよく作りました。九大の学生歌についても、「春の讃歌」は私が関ったものです。当時の九大には、学生が歌えるような歌があまりなくて、九大フィルやコールアカデミーも協力し、大学が毎年学生歌の募集を行っていました。「松原に」はその最初の年に選ばれた歌です。私はその審査委員もやっていたのですが、確か二年目に応募されてきたのが

「春の讃歌」です。応募されてきたものを見ると、一番から四番まで歌詞があつて良い詩なのですが、一つ一つが短く、これはどうかと思つたものです。それで、それじゃ私が何とかしようと思つて、審査委員を降りることとし、作詞者の了解を得て四番まであつた歌詞を二番までに組み直して応募したところ、なんとこれが採用されたのです。こうしたわけで、「春の讃歌」は二番までの歌となつてゐるのです。この時に賞品として万年筆をいただいたことは今でもよく覚えています。

ジョージ・セルとの運命の出会い

— 大学を卒業されてからは、すぐに指揮者の道を歩みだされたわけですね。

荒谷 最初からプロになろうと思つていたわけではありません。弁護士をやりながら週末に音楽をやれたら一番いいくらいにしか考えていませんでした。けれども、音楽のことを考えだすと、自分に

は他のことはできないなと分かり、思い切つて音楽に専念することを決意し、師匠であつた石丸寛さんの後を追つて東京に出たのです。石丸さんは、私がプロになることについてはあまり賛成ではなかつたようです。私だって、他の人から相談されたら賛成しませんよ。だって食べていけるか分からないんだから。それから、著名な先



生方の手法を懸命に学びました。その中でも、自分のメソッドを確立したといえるのは、アメリカでジョージ・セル(※)に出会つてからでした。

— ジョージ・セルとはどのような出会いだったのでしょうか。

荒谷 昭和四十四年のことです。当時文化庁が始めた在外芸術研修員の制度に応募し採択されたので

す。その時、指揮者仲間のアドバイスもあつて、研修先の一つにジョージ・セルのいるクリーブランドを選んだのです。私の当初の研修計画は、先にヨーロッパを回り、最後の仕上げとしてクリーブランドに滞在するというものでした。ところが出発直前にセルから手紙がきて、「来るのならすぐに来い」というものですから、急遽予定を変更し、クリーブランドから先に行くことにしたのです。結果的に二月から五月までクリーブランドとニューヨークに滞在し、セルの下で指揮を勉強しました。ところがクリーブランドでの研修を終えてヨーロッパに渡った後、セルは帰らぬ人となつたのです。もしも当初の計画のままだったら、おそらくセルに会うことはなかつたでしょう。まさに運命ですね。セルに会いたかつたのに会えなかつたという人が多数いる中で、私は幸

(※)ジョージ・セル(一八九七—一九七〇) ハンガリー生まれの世界的指揮者。自ら音楽監督を務めたクリーブランド管弦楽団を世界第一級のオーケストラに育てあげた。



1983年（S 58年）カイロ・シンフォニーのリハーサル風景

運だったと思います。セルは、ヨーロッパの名指揮者の良いところを明解に分析して自分のものにしていました。また、作曲者の意図を汲み、作品をとっても大切にしている指揮者でした。ただ、美しい英語を使いながら、私はこれらを必死に吸収しましたよ。セルに出会ってから作品に対する考え方、指揮者としてのイメージづくりが変わりました。セルに会えたことは私

の大きな財産です。

音楽とともに生きて

— セルとの出会いなどを経て、先生が指揮者として大切に思っていることを何でしょうか。
荒谷 作曲家の魂・理念を具現し、その作品をいかに活かすかです。音楽はオーケストラによっても、演奏を行うホールによっても変わってきます。自分の哲学を貫きつつも、オーケストラやホールに合った手法をとることも必要です。そこが難しいところです。

— 音楽家として、辛いことや苦しいことも多々あると思います。そういったことをどうやって乗り越えられているのでしょうか。
荒谷 壁にぶつかることはしょっちゅうですよ。そういう時は、ちよつと時間を置いてみたり、場所を変えてお茶を飲んだりしてみます。そうすると、また良いアイデアが湧いてきたりするものですよ。じつと同じところに留まればかりいると、良い考えが浮かばなくなることもありますよ。それから、



2000年（H12年）3月ベルリンフィルハーモニー大ホールでの日独音楽週間のリハーサル風景

物事を見る角度をちよつと変えてみるとか、柔軟さを持つことも必要だと思っています。車の運転だってそうでしょう。身体が硬直してるといい運転はできませんよね。そういう意味では、自分の専門以外のことに眼を向けることも大切で

す。私は絵を観ることが大好きですが、このことからいろんな良いエネルギーをもらっています。

— 最後に、今の九州大学、さら

には九州大学の学生に向けてメッセージをお願いします。

荒谷 私は、法学部と文学部を卒業し、九州大学には六年もの間お世話になりました。その間九大フイルにいたことは今でも私の糧になっていますし、九州大学は私にとって特別な存在です。九月のコールアカデミーの東京公演には、梶山総長、柴田理事（いずれも当時）にもおいでいただき、大変有

り難しく思っています。大学も今は移転などで大変だとは思いますが、何だかんだいっても、構成員は皆、なにがしか大学から恩恵を受けているわけですから、先輩が築き、残してきたものを大事にしつつも、自分のメソッドを見つけ、自分の

世界を築き上げてほしいと思います。それから九州大学はアジアに近いですよね。大きな声出したら九州島に届きそうじゃないですか（笑）。九州はアジアの国々にとって大切な地域であり、九州大学はその中であって中心となる大学

じゃないですか。そのことを意識し、大事に思っていると思います。いろいろなことを見聞きしますと、九州大学の皆さんは、教育・研究に頑張っておられると思いますよ。私は音楽をやってきましたが、音楽を含めて文化っていう

のは学問と似てるところがあるんじゃないでしょうか。長い時間をかけて作られていくもので、その間はちゃんと生かし続けていなきゃいけない。これから、派手に何かをやるということも必要なのかもしれませんが、様々なことにじっくりと取り組まれたらいいのではないのでしょうか。そうすれば世の中も、きっと九州大学の良さに気付いてくれると思います。

このインタビューは、平成二十年十二月十一日に、東京都千代田区の学士会館において行われました。

現在も現役の指揮者としてご活躍中の荒谷さんは、文部科学大臣からの地域文化功労者表彰（平成十六年）を契機に、「世界の名ホールでの演奏シリーズ」を開始され、現在までにウイーン、シドニー、アムステルダム、ボストンを終えられ、本年はプラハ（スメタナホール）での指揮を予定（六月十一日）しております。また、九大フィルは二〇〇九年に創立百周年となりますが、十一月二十三日にアクロス福岡シンフォニーホールで開催される記念演奏会においても指揮をお務めいただきます。

先輩が築き、
残してきたものを大事にしつつも、
自分のメソッドを見つけ、
自分の世界を築きあげてほしい。

シリーズ九大人
インタビュー

農業経営学

FRONT
RUNNER

シリーズ研究

ふろんと
ランナー

農学研究院 教授

南石 晃明

なんせき てるあき

「ふろんとランナー」は、九州大学の研究の最前線をインタビュで紹介するシリーズです。
シリーズ第十二回目は、農学研究院の南石晃明教授に芸術工学研究院の都甲康至教授が聞きます。

聞き手 芸術工学研究院 都甲康至 教授

VOL
12

農業をマネジメントする情報技術開発で、
消費者にとっても農業経営にとっても
安心・安全な
次世代フードシステムを構築する

農業使用リスク管理 システム

都甲 最近、食の安全ということに消費者の関心が集まっていますが、南石先生の研究もそれに深く関わるものですね。

南石 二〇〇七年に、九州大学に着任するまで、農業・食品産業技術総合研究機構に二十四年間研究に従事し、特に二〇〇三年以降は農業の適正使用を支援する情報システム（農業ナビ）の開発に重点的に携わってきました。研究成果を迅速に実用化するため、二〇〇六年にNPOを作り、研究機構の側面支援も受けながらシステムの普及を推進しています。

現在、山形県で一万二千人の農家の方が使っています。

都甲 エリアは山形県だけですか。

南石 もちろん、福岡も含め、全国普及に向けてNPOとして取り組んでいるところです。なぜ、山形県が皮切りだったかというと、無登録の農業使用の問題が起こった県なのですね。そこで少し農業取締法のお話をしたほうがいいと思うのですが、これまで農業に関して罰則規定があったのは農業メーカーと流通業者だけで、農家は努力義務でした。それが二〇〇三年の改正農業取締法の施行で農家にも罰則規定が設けられます。ところが、ある農家をこの虫に

携帯電話からの利用イメージ

【判定結果】
クミアイベルコート水和剤

☐ 選択した類似農薬
2005-04-29ベルコート水和剤

【本日まででの判定】
☐ 使用農薬
● 本剤使用回数1 回目

☐ 有効成分
イミノクダシアルベシル 酸塩
● 使用回数1 回目

☐ 収穫前日数
● 2005-02-14まで収穫出来ません。

【明日以降の判定】
☐ 該当農薬
● 使用予定無し

☐ 有効成分
イミノクダシアルベシル 酸塩
● 使用予定無し

通常のカメラ付き携帯バーコードリーダー利用で、バーコードを読み取れる。
専用iアプリでより簡単操作で農薬ナビ判定



都甲 農家の方は大変でしょう。
南石 いろいろな野菜を作っているとか、忙しい時期などすっかり間違っわけです。その技術的な解決策の一つがi-T活用でした。バーコードリーダー付きの携帯電話で農薬容器のバーコードを読み取り、農薬を使う前にその農薬が使えるかどうか判定

使うのはいいけど、別の虫はだめとか、収穫前三日までは使っていないけど、二日前になったらもう使っていないなどかなり複雑で。
都甲 運用の難しそうな法律ですね。
南石 ある農薬に入っている成分は別の農薬にも入っていますし、その化学成分単体の使用回数まで制限がかかるのです。

できるシステムも開発しています。問題の無い農薬であればそのまま使用履歴の記帳が簡単にできます。
都甲 それはトレーサビリティシステムにもつながりますね。
南石 はい。通常、トレーサビリティというところ、食品事故が起こった場合にいかにか早く農産物を回収するかという場面をイメージしますでしょう。確かにEUでは流通の履歴情報を指します。しかし、アジア諸国では、生産段階でという農薬が使われ、栽培されたかという生産履歴のほうにすぐ関心あるのです。と言うのも、仮にスーパーの野菜に残留農薬が検出された場合、流通履歴があれば回収は早くなります。しかし、汚染されることを防がなければ農産物の安全性は必ずしも向上しません。根本的な解決にはならないのです。農薬の誤使用が起ると農産物は破壊され信頼も失うことになります。農薬ナビとトレーサビリティシステムの連携が重要です。

農家に生まれた科学者ならではの独自視点
都甲 南石先生の専門は農業経営学です。食の安全やトレーサビリティとはどうリンクするのでしょうか。

南石 私は農家の長男です。小学校は複式学級、全校生徒六十人くらいという田舎に育ちました。小さい時は世の中の職業は農業しかないと思っていたくらいで(笑)、家業を継ぐのは当然と思い、地元大学の農学部に進んだわけです。その時から興味があったのが、どう意思決定すれば合理的に農薬ができるか、あるいは合理的な意思決定は何かといったこと。それは気象の変動、不安定な価格といった様々な不確実性やリスクという概念と不可分です。農薬の誤使用をいかに防ぐかということも私の中ではリスクに関する研究なのです。ただし、以前は農業経営自体のリスクがテーマで、作物の組み合わせをこういう風に変えたら農業所得変動のリスクが下がるといった営農計画システムや技術体系データベースの開発・構築に軸足を置いて取り組んできました。

都甲 経営判断ではリスクマネジメントは大事ですね。
南石 作物を組み合わせるのは、実は株の組み合わせによって小さいリスクで安定した収益を得るといいう株式投資のポートフォリオと同じなのです。金融工学の理論と農業分野で昔から研究し実践してきた理論が基



本的には同じなわけです。現在では、こうした方法は確率的計画法と呼ばれると思います。この分野で学位論文を作成し、教科書も作りました。
都甲 さらに農学とi-Tを融合されるなど興味の範囲が本当に幅広いし、融通無碍ですね。
南石 農学の分野では、私のようなスタンスの研究者はそんなに多くないと思います。農林水産省の研究所に入った時は、先輩から「古典を読んで、農家に学べ」と言われました。これは社会科学では王道ですが、私は農家の息子ということもあって、農家に学ぶだけ、聞いた話を要約するだけで研究になるのかと当時、率直に思ったものです。それで農業



聞き手：都甲康至教授

という冠の付かない日本オペレーションズ・リサーチ学会というところに参加して、数学モデルを発表したり、特殊情報処理技術者の資格を取ったりと、いろいろチャレンジしました。ソフト開発も理論を実践するためのツールとして取り組んだものです。最近は岩手県や山口県の農業試験場と協力して、農業に関わる様々なデータを入れた農業技術体系データベース開発も行っています。作物を作るのに、どんな肥料が必要で、どういう農薬を使い、労働時間はどのくらいかといったことを全部データベース化しています。さらにこれらのデータベースと農業ナビを統合する農林水産省のプロジェクトも今年からスタートしました。この中には環境影響評価も含まれています。

例えば、トマトを作ると二酸化炭素がどのくらい出るかといったことや、同じトマトでも無農薬のトマトと法定基準内の農薬で作るトマトは、経

済的にはどうなのかといったことを判断するものです。これも農業が環境に及ぼすリスクの評価、意思決定の一つですね。

都甲 そうした取り組みは消費者にも伝わっているのですか。

南石 その調査も継続中です。消費者に「どういう生産流通段階から、米や野菜の安全性が損なわれると思うか」という質問をすると、やはり生産段階で問題が起きていると考えられている。ですから、生産段階で安全を順守していることを伝えることが肝要なのですが、これにも極めて難しい部分があるのです。今の農薬は毒性もかなり低くなっていますが、野菜の中には何回も農薬を使用しているものもあります。そのリストを消費者が毎日見たいかという疑問でしょう。消費者側からすると、いちいち詳しい履歴が見たいのではなく、農薬が適正に使用されているという認証のようなもので十

分ではないかという意見が多いようです。最近、農業生産におけるリスク管理の方法としてGAP（適正農業規範）という考え方も普及していて、この農場認証を受けている農場は世界で八万農場以上あります。

「環食不二」と医食同源

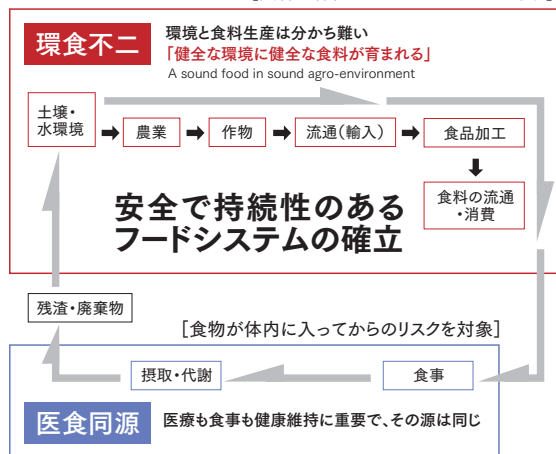
都甲 消費者、生活者の信頼を取り戻す取り組みはグローバルに始まっているんですね。

南石 以前は美味しい作物をたくさん収穫する技術を持った農家を篤農家と呼びました。現代の篤農家には、農業取締法やトレーサビリティなどをはじめ、いろいろなルールや条件

にいかに対応できるかといった情報処理の能力やマネジメント能力が求められているのではないかと感じています。また、スペインでは、農業者の研修を受けて、資格試験に受かった人しか農薬を購入できない制度があります。つまり、広い意味の教育充実ですね。農業人材を育てるこ

次世代フードシステムの理念と対象

〔食物が体内に入るまでのリスクを対象〕



「環食不二」：環境と食料生産は分ち難いという筆者の造語である。
これは、「健全な環境に健全な食料が育まれる」という理念を表す。
医食同源：ニュートリゲノミクスなどの発展

とで、食の安心を実現していくという考え方です。そういう観点からも大学の役割はすごく重要になってくると思いますね。

都甲 食という身近な事柄から、どんな未知の世界が広がっていくか。南石先生の造語である「環食不二」という言葉もユニークですね。

南石 食の安全は客観的なデータから分かることですし、安心は心理的な信頼関係の問題ですけれども、突き詰めて考えていくと、それらは環境問題とどうしてもつながってくる。そのことをはつきりとしたメッセージとして伝えるには新しい言葉があった方がいいのじゃないかと思った



南石晃明教授

のです。食を育てる土地や水が汚染

うですが。

されていたら、農薬の使い方が正しくても作物が汚染されます。また、食糧物の残渣の処理も最後は環境に戻すのですから、これも看過できない問題です。環境と食は分かち難く一つのループでつながっているというところ。医食同源という言葉とともに、次世代フードシステムを考える時の理念です。

都甲 食の安全、安心を追求するには農学だけではなく、様々な分野を横断しなければなりませんね。

南石 おっしゃるとおりです。農学で網羅するのは生産段階のことが多いですが、今後はいろいろな分野を横断し、融合する作業が不可欠です。**都甲** 学術的には大きな壁もありそ

南石 科学の総合化は永遠のテーマですが、研究成果を社会還元しようとする、そこは避けて通れないでしょう。場合によっては科学の定義自体も変わるのではないかと気がしています。科学がどう人類社会に貢献できるのが、今、問われているのだと思います。

農業人の情報処理能力やマネジメント力を養成する

都甲 融合によって新しい生産者、新しい消費循環ができると思います。ね。先生の今の目標を少し具体的に聞かせていただけますか。

南石 私が九州大学に移った理由の一つでもあるのですが、今までの研

究は一応の成果を見たと思っっている、今後の目標は理論化することだと考えています。理論化とは抽象化、概念化することですから、農業の背景が違ふ海外の農業者も含めて理解していただけるようになります。大きい話ですけども、私のアイデアやシステムが将来海外でも活用されるようになればいいなという夢があります。新しい理論、新しい考え方を受け入れてもらうためには教育、人材育成の重要性も痛感しているところです。ソフトもかなり頑張って使いやすく設計しているのですが、やはり最低限の知識は必要ですね。そして、もう一つ重要な要素はビジョン。先生のご専門であるデザインにも関係すると思うのですけれども、ビジョンがないとデザインはできません。制度設計も含めて、日本の農業がどうあるべきなのかというブランドデザインにもチャレンジしたいと思います。

都甲 ありがとうございます。では、最後に若い人材たちに向けてメッセージをいただけますか。

南石 私は大学院進学後、恩師の推薦を得て、当時の文部省学生国際交流制度で米国コーネル大学に一年間留学しました。家業の農業を継ぐつ

もりだったのですが、留学時代に貴重な経験を積み、研究者を志しました。皆さんもチャンスがあれば、ぜひ留学してほしいと思います。留学先での体験と人との出会いは、時に人生観を塗り替えるような影響力をはらんでいるからです。



左より、南石教授と聞き手の都甲教授。

南石晃明教授 プロフィール

岡山県出身。一九八三年岡山大学大学院農学研究科修士課程食料生産管理学専攻修了。一九九〇年農学博士（京都大学）。一九八三年農林水産省入省。農業研究センター等において経営管理・農業計画等に関する研究に従事し一九九六年から研究室長。二〇〇三年、国立研究機関組織再編により独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構研究チーム長。二〇〇七年四月から九州大学大学院農学研究院教授、現在に至る。専門は農業経営学。

伊都キャンパスの新施設を紹介するシリーズ

伊都キャンパス施設探訪

学内共同教育研究施設

超伝導 システム科学 研究センター

本研究センターは、平成十五年四月に十年時限で発足した学内共同教育研究施設で、九州大学の超伝導関連教育研究施設としては第三世代になる。平成十八年度の伊都への移転以降、図1に示すCE50南棟とCE51北棟の二棟構成で再出発している。今回は、最新の超伝導線材・薄膜材料の超伝導特性を観測する最先端の評価装置を中心に施設紹介する。本研究センターでは、材料特性の評価・改善に関する研究成果に基づいて、超伝導のエネルギー・環境分野や情報・医療分野への応用を旨とした教育研究を行っている。



図1 超伝導システム科学研究センター外観

エリア案内図
Area Map



Welcome to
ITO Campus



超伝導システム科学研究センター

CE50 CE51

各種の超伝導線材・導体の実用環境下での交流損失を国際標準化が進められているピックアップコイル法により高精度に測定し、低損失化のための方策を線材製造工程にフィードバックして高性能線材開発を支援している。図4は、冷凍機冷却計測用クライオスタット、データ処理装置などの計測システムの全景である。また、線材の断面形状や使用環境に即して考案した鞍型ピックアップコイルの概略図も示している。線材・導体の性能評価に基づいて、次世代線材の電力機器応用に向けた開発研究を支援している。

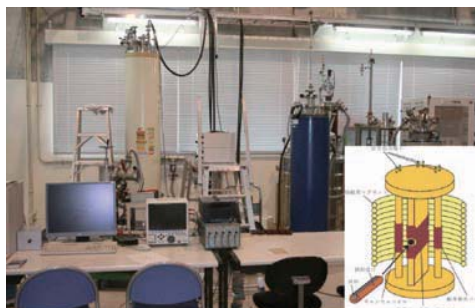


図4 超伝導線材・導体交流損失計測システム

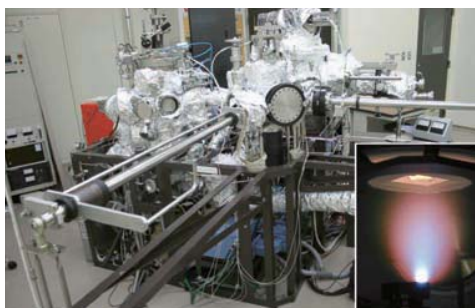


図5 SQUIDセンサ製造システム

レーザ蒸着法を用いた高品質な高温超伝導(YBaCuO)薄膜を作製している。図5は装置の外観と電極部ブルームプラズマの一例である。本装置を用いて、ナノ構造の人工ピンを導入した電力用の高品質薄膜を開発し、電流輸送特性を大幅に改善する事に成功している。また、本装置によりSQUIDと呼ばれる高感度な磁気センサを作製し、これを用いた磁気的な免疫検査装置等の高感度なバイオセンサシステムを世界に先駆けて開発し、その有効性を実証している。

(文責：システム情報科学研究院超伝導科学部門 教授 船木和夫)

交流損失計測システム

超伝導材料や超伝導装置の特性解明の実験には、液体ヘリウムや液体窒素などの寒剤、あるいは幅広い温度領域で温度設定できる冷凍設備が欠かせない。図2に示す冷凍機端末(1.5 kW, 20 K)は、隣接する低温センタ(CE60)のヘリウム液化冷凍機に大型ヘリウム移送管により直結されており、それぞれ、冷凍のための圧送低温ヘリウムガスの温度制御及び液体ヘリウムの貯蔵に必要なインフラである。



図2 超伝導装置冷凍装置と液体ヘリウム容器

超伝導装置冷凍機端末と液体ヘリウム容器

最先端線材特性評価装置

高磁界型低温レーザ顕微鏡システム(図3左)は、実用環境に近い高磁界下で、次世代線材として有望視されている高温超伝導(YBaCuOなど)テープ線の損失を可視化するためのもので、世界に先駆けて線材内の損失可視化を数ミクロンの空間分解能で観測することに成功している。また、SQUID(超伝導量子干渉素子)を用いた高感度磁気測定システムとして世界標準となっているカンタム・デザイン社のMPMS(Magnetic Property Measurement System、図3右)を有しており、各種材料の磁化特性評価を行っている。

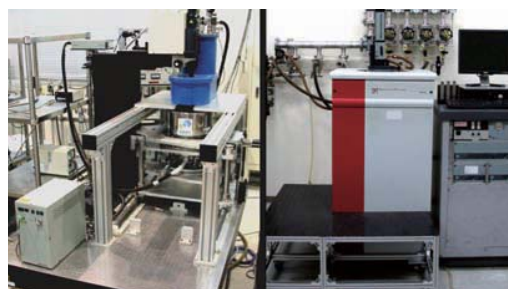


図3 最先端超伝導基礎特性評価装置

知の新世紀を拓く

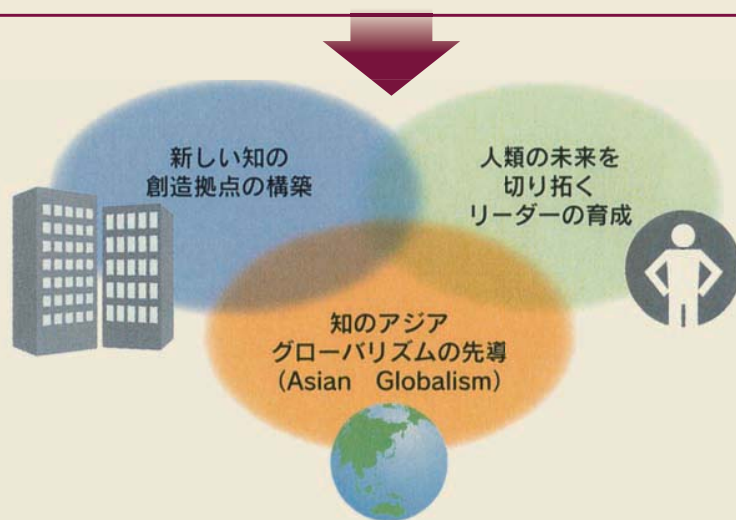
九州大学百周年記念事業

九州大学は、創立以来、我が国の発展を支える人材の育成や、社会貢献、国際貢献に尽力してきました。二〇一一年に、百周年を迎えるにあたり、さらに発展・飛躍すべく、新しい知の創造拠点の構築を目指すとともに、知のアジアグローバルズムを先導し、人類の未来を切り拓くリーダーを育成することを大きな目標として、様々な記念事業を計画しています。

今回は、動き出している百周年記念事業の概要について紹介します。

九州大学百周年記念事業

1. 教育研究環境の整備充実を図るための九州大学基金の創設
2. 生涯学習時代に対応する社会人等の受入れ推進事業
3. 産学連携・地域連携等推進事業
4. 国際交流推進事業
5. 九州大学百年史の編纂と記念式典・記念シンポジウム等の開催



募金のお願い

これらの事業を推進していくために、基金を創設して、学内の教職員はもとより、広く産業界並びに卒業生、在学生の保護者の皆様、本学をご退職された方々にもご寄付のご協力をお願いしています。

なお、百周年記念事業募金についての詳細はホームページ <http://100th.jimu.kyushu-u.ac.jp/> でもお知らせしています。

●お問い合わせ先

九州大学百周年記念事業推進室

〒812-8581

福岡県福岡市東区箱崎6-10-1

電話 092-642-7397・7398

FAX 092-642-2113

E-mail 100thinfo@kyushu-u.ac.jp



KYUSHU UNIVERSITY 100th 2011

知の新世紀を拓く

百周年記念事業を進めていく上での象徴となるシンボルマークです。スローガンである「知の新世紀を拓く」をテーマに、未来への無限大の可能性とダイナミズムが表現されています。

「知」の象徴としての知恵の輪をモチーフとしたシンボルマークは、知恵の輪を構成するパーツが「100」を連想させる形に並び、さまざまな角度から見た三次元のバリエーションを生み出します。絡み合った輪が象徴する困難な課題を解決に導く多様な知性が、動的な知恵の輪の造形に込められています。

空間の中にさまざまな角度で現れるメタリックな二つの輪は「∞（無限大）」の可能性をイメージさせ、中央の九州大学カラーの輪は、変化する多様な「知」の可能性をつなぎ、新たな知を生み出す媒介者としての役割を象徴しています。

このシンボルマークは今後、記念事業として展開される様々な媒体やイベント等において使用していきます。



New Year Day の花火を見に行ったテムズ川にて。右から2番目が著者。

九大生が案内する 世界のキャンパス

The School Of Oriental and African Studies
交換留学先



イギリス

ロンドン大学

21世紀プログラム 4年

根津 弥

ねつ わたる

二〇〇六年の夏。当時、開発学に興味を持っていた私は、「開発学の盛んなイギリスの大学に行くしかないやろー」と一念発起。紆余曲折はありましたが、翌年からロンドン大学東洋アフリカ学院（以下、SOAS）に留学することとなりました。

大学では、英語の授業と平行して開発学、国際関係学、国際政治経済学、人類学の授業を履修しました。授業では大量の予習文献が課され、定期的なプレゼンなどでその負担は並大抵のもてはありませんでした。その分日本では得られない英語の学術的な能力が身に付いたように思います。

またSOASはアジア、アフリカ各国（とthe society）（サークルのようなもの）が充実していました。Japan Societyで日本に関心のある学生と交流したり、Palestine societyが主催したドキュメンタリー映画の上映会に参加したりと、学外でも多くの刺激的な経験がありました。

そしてSOAS留学の大きな魅力は、世界有数の大都市、ロンドンでの生活を満喫できるという点です。文学、アート、音楽、ミュージカル、サッカー……。ロンドンは教養の守備範囲が広いほど楽しいことのできる街です。私は暇な週末は美術館を散策し、パブでビールを飲みながらサッカー観戦をして過ごしていました。他にも長期休みにはアフリカで貧乏旅行をするなど、留学生活を通して様々な得がたい経験をすることができました。皆さんも是非、交換留学に挑戦してみてはいかがでしょうか。

大学情報

The School Of Oriental and African Studies

ロンドン大学はそれぞれのカレッジが独立した大学として機能しており、SOASはそのうちの一つのカレッジです。名前の通りアジア、アフリカの研究に特化した非常にユニークな人文・社会科学系の大学で、地域研究ではイギリスのトップレベルにあると言えるでしょう。こうした大学の特色から、EU圏外からの学生が全体の三十%を越えています。またこのようにある意味マニアックな大学ということもあり、非常にオルターナティブな視点を重んじる雰囲気があるように感じました。ビルマ（ミャンマー）の民主化運動のリーダーとして有名なアウン・サン・スーチーさんも、かつて研究生として在籍していたそうです。

キャンパスはRussell SquareキャンパスとVernon Squareキャンパスの二つを有しており、二つのキャンパス間は徒歩で二十分程度です。どちらもロンドンの中心街に位置しており、Russell Squareキャンパスのすぐ裏には大英博物館があります。



キャンパスの入り口にて

九大フィル、カンボジアで演奏！

平成二十年十一月三十日（日）、日本とカンボジアの外交関係樹立五十五周年を記念してカンボジアのプノンペンで初めて開催された「第一回大学留学フェア in カンボジア」に九州大学も参加し、学生参加者として九大フィルハーモニーオーケストラから四名が同行し、フェアの最後に特別演奏を行いました。

演奏に先立ち、工学部三年の肥塚さんがカンボジアの現地語であるクメール語を交えて挨拶を行うと会場は暖かい空気に包まれました。演奏では弦楽四重奏で「ふるさと」などを披露し、曲が終わるたびに客席から大きな拍手が起こっていました。

また、当日はカンボジアの国営テレビ及び民放テレビが取材に来ており、演奏の様子が撮影していました。

今回の留学フェアは独立行政法人国際協力機構（JICA）が主催し、王立プノンペン大学内のカンボジア日本人材開発センターで行われました。日本からは早稲田大学をはじめ十大学が参加し、当日のフェア参加者は五〇〇名を超える盛況ぶりでした。



留学フェアで現地学生と交流



演奏の様様

九州大学・北海道大学合同活動報告会を開催

平成二十年十二月十日（水）、都内の都市センターホテルにおいて、「九州大学・北海道大学合同活動報告会」が開催されました。この報告会は、日本の北と南に位置し、先端的な教育研究活動を展開している両大学の姿を広く社会にご理解いただくことを目的として開催しているものです。

四回目となる今回は、地球的規模の課題である環境問題にフォーカスし、「Ecology Innovation 北から南から環境問題を考える」をメインテーマとして開催しました。

合同活動報告会では、両大学の理事から研究活動を中心とした近年の取組についての紹介や、最先端研究紹介として、山本準一教授（総合理工学府）が「リチウムイオン電池の安全性」と題して発表を行いました。また、報告会の後半では永島英夫教授（先端物質化学研究所）、島谷幸宏教授（工学研究院）が参加したパネルディスカッション「環境問題への新たな挑戦」を実施し、活発な討論が行われました。

当日は、二〇〇名を超える参加があり、参加者は北と南の教育研究拠点である北海道大学と九州大学の先端的な研究教育活動の成果に熱心に耳を傾けていました。

また、九大・北大による下記の合同セミナーを予定しています。

第2回「九大・北大合同フロンティア・セミナー」

テーマ「観光による地域マネジメント」

平成21年2月13日（金）17:30～
東京ミッドタウン カンファレンス Room9
ミッドタウンタワー 4階
（東京都港区赤坂9-7-1）



ユーザーサイエンス機構の 子どもプロジェクトが Library of the Year 2008 優秀賞を受賞

ユーザーサイエンス機構（USI）の子どもプロジェクトが主宰する「絵本カーニバル」が、NPO法人知的資源イニシアティブ（Intellectual Resource Initiative）が主催する Library of the Year 2008 において優秀賞を受賞しました。

この優秀賞は、これからの日本の公共図書館のあり方を示唆する先進的な活動を行っている機関に対し、毎年授与しているものです。



「絵本カーニバル」は、目黒実特任教授と人間環境学研究院の南博文教授が中心となり、絵本の持つ力を最大限に引き出す空間とデザインを用意し、子どもと大人が、ともに共有できる居場所を提供しています。

今回の受賞は「広域的な巡回図書館活動と美術館等各種機関との連携を通じた幅広い活動によって、子どもや地域を育む「種」となる図書館のあり方を示している」と、全国各地での実施や九州大学病院小児医療センターでの毎月の実施などが評価されたものです。

USIの子どもプロジェクトは、これまで、実践子ども学の構築、子どもの居場所づくり、などの子どもに関わる先駆的な活動を行ってきたおり、これまでも、「子どもとともにデザイン展」、「子どもたちの移動祝祭日展」などにより、二〇〇六年、二〇〇七年と続けて、グッドデザイン賞「新領域デザイン部門」を受賞しており、その活動が高く評価されています。

第七回アジア学長会議が台湾大学で開催

平成二十年十一月十三日（木）・十四日（金）、台湾大学（台湾…台北市）で第七回アジア学長会議が、十力国二十一大学が参加して開催されました。

アジア学長会議は、アジアの有力大学の学長が相互に信頼関係を醸成し、新たな研究者交流や創出に寄与することを目的として九州大学が提唱し、二〇〇〇年十二月から始まった国際会議で、今回は九州大学から、有川節夫総長、水田祥代理事、緒方一夫教授（熱帯農学研究センター）ほか、関係者が参加しました。

会議は、二日間にわたり開催され、一日目は、主催大学の台湾大学 Si-Chen Lee 学長の挨拶と、有川総長の基調演説で始まり、引き続き開催したセッションでは、水田理事が「Innovation and Future Challenges of Kyushu University」と題して本学の取り組み状況を報告し、セッションの進行役を務めました。

二日目は、午前中に二つのセッションが行われ、その後、アジアの若手研究者の研究奨励を目的として設立された「若手研究者優秀賞」の授賞式が行われた後、有川総長と Lee 学長の挨拶で会議は終了しました。また、本学と長い交流の歴史を持つ台湾大学は創立八十周年を迎え、十五日（土）には同大学の八十周年記念式典が盛大に行われ、前夜祭では、有川総長が招待大学を代表して祝辞を述べました。



第7回アジア学長会議の参加者

新聞で報道された九州大学

平成二十年十月〜十一月

10月

こころの風景 一枚の写真から
競争培った「個人力」
ナノテク時代開いた九州大特任教
新海征治さん
(毎日10/1)

オランダの視察団が福岡へ ゲーム産
業振興で連携 六日、九大の施設見学
(西日本10/17)

九大が遠隔医療センター
アジア拠点間で協力
(日刊工10/2)

アジア遠隔医療拠点施設を開設 九大
病院「アジア遠隔医療開発センター」
(西日本10/25)

九大 有川学長が就任
「自由かつ達な研究支援」
(毎日朝日10/26)

九大ブランドの「九州大吟醸」
地域の環境保全に一役
(毎日10/3)

「劇場支配人」地域の切望
九大大学院・プロ養成講座半年
藤原恭司 九大大学院教授
(朝日10/3)

科学者会議が九大でシンポ あす開幕
(西日本10/3)

時評 小説 地べたの言葉
描く「昭和」 松本常彦 九州大学大
学院比較社会文化研究院教授
(読売10/3)

科学技術振興調整費 その成果 上
九州大学「次世代研究スーパースター
養成プログラム」
(科学10/3)

研究担当理事・副学長 村上敬宜氏
(科学10/3)

郭沫若研究者ら集つ
九大留学九十年記念
(読売10/3)

九州大情報基盤研究開発センター長に
青柳氏
(西日本10/4)

仕事 生活 自分流 九州大学教授
村藤功さん 「M&Aアドバイザーの
秘密」出版 M&A支援リアルに
(西日本10/6)

九大「伊都祭」PR
ネットで動画配信
(朝日10/6)

足寄森のレスキュー隊 環境の大切さ
学ぶ 九州大学北海道演習林等共催
(千勝毎日10/6)

S・I・A 人物紀行 モンゴル編
上・中・下 高樹のぶ子 九州大学
アジア総合政策センター特任教
(西日本10/6)

「第三回KANSEIカフエ」
感性工学学会大会で一般公開
九州大学ユースサイエンス機構教授
坂口光一氏
(日刊工10/7)

冷たい彗星内に「高温」物質 九大な
ど研究 太陽系誕生時の動き示す
(朝日山口10/7)

九大 目の難病に遺伝子治療 倫理委
が計画承認 世界初の実施目指す
(西日本10/7)

植物の世界を探索
九大博物館が来月二十九日講演会
(朝日10/8)

アジアデジタルアート大賞展
画像作品を募集
(西日本10/9)

ひと 今月発足した運輸安全委員会の
初代委員長に就任した九州大名誉教授
後藤昇弘さん
(西日本10/10)

お知らせ 九州大学大学院薬学府附属
薬用植物園公開講座
(朝日10/10)

アジア株暴落 欧米資金流出で打撃
丹羽由一 九州大学大学院特任教
(西日本10/11)

ドクターに聞く
九州大学病院整形外科 播磨三氏
(西日本10/12)

検証 県教委汚職
口利き絶つ倫理条例を
斎藤文男・九大名誉教授に聞く
(朝日10/12)

トライ!!監督は弁護士
九大ラグビー部・大野慶樹さん
(朝日10/12)

討論 西日本フォーラム二十一
「わたしたちの九州―ふるさと再生へ
のヒント」 西日本新聞・九州大学分
権型社会論ゼミ
九州全市町村長アンケート
(西日本10/12)

P・inと結婚、出産：大きな壁
女性研究者支援へ本腰 九大などモデ
ル事業 補助者派遣、情報交換の場も
(西日本10/15)

戦略創造研究に「情動」など四件
科技振興機構 九州大学高原淳教授
(日経産業10/15)

九大に水素ステーション
爆発事故教訓に安全対策を強調
(朝日10/15)

まちなか 催し 別府市 九州大学病
院別府先進医療センター市民公開講座
(大分県10/16)

中国の学生が農業視察
南石晃明・九大大学院教授
(毎日10/16)

酸化亜鉛、電解法で微小化 九大と平
昭 液晶電極の代替に 中島邦彦教授
(日刊工10/17)

中国人民大学と共同教育
九大経済学府
(日刊工10/17)

九大など三校と単位互換 福岡工業大
学「国公立大コンソーシアム・福岡」
(日刊工10/17)

させばスタンピングテスト
最優秀に九州大職員伊東和彦さん
(西日本10/18)

音楽評 「歌の美しさ」を前面に
西日本オペラ協会 コンセル・ビエー
ル「シ・ファン・トゥツ」
中村滋延・九州大学大学院教授
(西日本10/18)

開かれた法曹への道 法科大学院
九州大学法科大学院
(西日本10/18)

緑あふれる美しい都市・福岡をめざす
福岡市の新「緑の基本計画」策定に向
けて 九州大学大学院教授 佐藤優氏
(読売10/18)

ドクターに聞く 九州大学病院整形外
科講師 中島康晴氏
(西日本10/19)

週刊九州 キャンパスは美の宝庫
巨大壁画、肖像彫刻：実は巨匠の名作
九大、移転調査でゆかりの品々
(朝日10/19)

大学の知恵活用探る 地域づくり連携
確認 唐津で「産官学トップサミット」
有川節夫総長
(佐賀10/21)

九大大学院芸術工学研究院
福岡県福岡市と共同研究
(日刊工10/21)

数学の面白さ学ぶ 鹿島高
九大教授が出前講義 システム情報科
学研究院 山下雅史教授
(佐賀10/22)

P・inと夏を変えた居座り前線
ギリラ豪雨来年も？
九州大学理学研究院守田治准教授
(西日本10/22)

通勤手当二億五九〇二万円ムダ
国立大など〇六、〇七年度
(西日本10/23)

採用早期化 是正求める
八大学工学部長会議
(日経10/23)

第九回九州大学病院別府先進医療セン
ター市民公開講座
(朝日10/23)

七十七例目の脳死判定
(読売10/23)

九大病院での脳死移植中止
(西日本10/23)

謎よぶタガメ 福岡で四半世紀ぶり発
見 九大DNA鑑定へ
(朝日10/23)

新炭素資源学第一回国際シンポジウム
九州大学
(日刊工10/24)

「コメでバイオ燃料生産を」
九大伊東教授が講演
農学会、温暖化対策シンポ
(科学10/24)

かお 第二十二代九州大学総長に就任
した 有川節夫さん
(南日本新聞10/25)

教育力向上へ初の推進会議
会長に梶山千里前九大総長
(朝日10/25)

九州の大学・短大特集二〇〇八
個性きらり 九州大学大学院法
学府 公法・社会法学専攻 林容淑さん
(西日本10/26)

母国の料理で国際交流 二十六カ国の
九大留学生が参加 福岡市
(西日本10/27)

JNN九州沖縄ドキュメント ムーブ
「草原の国 風の子供たち」作家高樹
のぶ子の見たモンゴル
(毎日10/27)

旧国鉄の「負の遺産」売り込め
休眠トンネルを省エネ冷蔵庫に
食品貯蔵へ空調で低温化
工学研究院 佐々木久郎教授
(西日本10/27)

福岡市内の四大学連携 大学院修士レ
ベルで環境・エネルギー研究
(読売10/28)

先読めない「市場主導」 九州大
院経済学研究院 丹羽由一教授に聞く
(西日本10/28)

市長座談会 福岡市長と語る緑のまち
づくり 九州大学大学院芸術工学研
究院 佐藤優教授
(読売10/28)

コーヒールは糖尿病予防効果あり？
メ タボ男性募集 九大が十六週間調査へ
(読売10/28)

南風録 有川節夫総長
(南日本10/29)

レーザー 有川節夫九州大学総長
国超える挑戦 福岡・釜山
交流から連携へ 上 大学連合
地域特微生かし人材を
(西日本10/29)

あす九大で「伊都祭」 今年のテーマ
は環境 地域の特産品販売も
(日刊工10/30)

第六十七回西日本文化賞 地域に大き
な足跡 二〇〇八年度受賞者の横顔
(西日本10/31)

福岡・釜山フォーラム 構成メンバー
九州大学総長有川節夫氏
(西日本10/31)

聞きたい 「憲法の番人」になった抱
負は 最高裁判事 桜井龍子さん
(西日本10/31)

九大で糸島環境サミット きょう

(読売11/1)

アジアビジネスセンター 福岡で二十日フォーラム 福岡銀行と九州大学「アジアビジネス戦略フォーラム」(西日本11/1)

福岡ー釜山フォーラム 行政と民間「車の両輪」に(西日本11/2)

秋の叙勲 県内百十八人(読売11/3)

市民公開講座 あなたの「悪玉」(LDコレステロール)、だいじょうぶ?九州大病院 澤山泰典准教授(西日本11/3)

米公文書が暴く 日本の戦争能力開戦前夜の調査 アーカイブ保存に「三輪宗弘 九州大学教授」(日経11/4)

世界をリードする半導体開発拠点に「システムLSI設計試作センター」開所記念 産学官の三氏に聞く 安浦寛人理事・副学長(西日本11/4)

砂浜 消滅の恐れ 岡垣の三里松原県が二十年後の侵食予測(読売11/4)

町 九大など原因調査へ 弁当をつくる楽しさ伝えたい 地域で何がやれるかを考えよう 佐藤剛史農学研究院助教(西日本11/4)

ソーシャルワーカー配置 五島市の油症患者対象 九大病院診療センター 谷尾さん地元採用(読売11/5)

九州大学 ホームカミングデー二〇〇八くさようなら そして ありがとう六本松(西日本11/5、9)

「ケヤキ」庭石芸術に 罪を憎んで石を憎まず 約三十個九大キャンパスで再生(毎日11/6)

日中韓の「和」探る ネット世代に高まるナショナルリズム 大野俊九州大アジア総合政策センター教授(朝日11/7)

食べ残しが飼料になった!

前原・怡土小児童ら体験 九大、糸島地区の実験

「アイガモが食べた」と歓声(毎日11/7)

時評 小説

「捨て方」に心根あらわれ

松本常彦比較社会文化研究院教授(読売11/7)

九大六本松跡地利用 住民意見聞き整備を 福岡市議会請願審査(毎日11/8)

九州大に「自動車学」 大学院来年度設置(読売11/8)

キャンパスで森づくり 自然観察や竹笛作りも 二十三日にイベント 九大伊都キャンパス(西日本11/8)

音楽の視覚化 新作音響と映像統合 中村滋延芸術工学研究院教授「ラーマヤナ」公演(読売11/8)

Pinと 九大祭も「断酒 宣言」時間限定販売実装(西日本11/8)

なんしよう? 福博、ブラリぶら海面上昇、博多湾を襲うか? 下山正一理学研究院助教(西日本11/9)

超新星 みんなで探そう 九大助教ら 観測網への参加募集(朝日11/10)

「アジアビジネス戦略フォーラム」九州大学(日経11/10)

福岡市都市景観賞に十件 九州大旧工学部本館(東区箱崎)(読売11/11)

環境で北大と合同報告会 九州大学(毎日11/11)

「紫水晶」など六百点 国内外の鉱物公開 十五日、九大で地元の意見伝える場 福岡市「URに促す」 九大六本松跡地利用(西日本11/12)

日韓地域交流 広がるすそ野 学者 都市連携探る 福岡・釜山チームにシンポジウム、九大で(西日本11/13)

福岡ー釜山フォーラム 第三回会合 有川節夫総長 韓国研究センター(西日本11/13)

「水について考えよう」 十五日シンポジウム 九大西新プラザ(西日本11/13)

脳性マヒ支援援え三十年 東区・利光さん夫妻 ほぼ毎日、九大で 学生たち共鳴(毎日11/13)

講演会 紅葉異変 桜悲鳴 温暖化が直撃 九大四十年後予測(朝日11/14)

ユーザー感性学・自動車学 九大に新大学院 来春 文理枠超え人材育成(朝日11/15)

再生の力ギは 大分県教委汚職教育関係者の提言 採用試験は全国統一で 八尾坂修教育学部長(西日本11/16)

福岡・釜山地域連携シンポジウム 北東アジア経済の要に 九州大学短信 九大病院総合診療部市民公開講座「ずっとすこやかにー生活習慣病の改善で健康長寿」(西日本11/17)

不登校生の学校復帰支援シンポジウム 不登校生にいまできること家族・学校・関係機関の連携 田島誠一人間環境学研究院教授(読売11/18)

研究室を歩く 住民の生活習慣病を分析 九州大久山町研究室(読売11/18)

食シヨック 変わる文化と習慣「あの味」データで残す(読売11/18)

九州大学大学院教授 信友浩一氏 介護福祉士のサポーターに(読売11/18)

唐津市近代図書館 九大と本の貸借開始 専門書なども手軽に(佐賀11/19)

お知らせ 九大祭講演会「学祭なのにマイノリティですけど何か?」今、私たちは何をすべきか(朝日11/19、20)

教育の中身、成果を分かりやすく 福岡からの教育情報発信 地の世界的拠点 人類の未来を切り拓く リーダーを育成 九州大学(朝日11/20)

脳テラに語る 九大生らにカフェ 福岡で来月六日(朝日11/21)

九州大学マンドリンクラブ第百三十七回定期演奏会(日経11/21)

あす九大学園祭で慈善ライブイベント「Road to Red in Fukuoka」(西日本11/21)

キャンパス統合イベント 九州大学モノづくり連携大賞 九州大学のネットワークを活用した「置けば無線LANエリア!手乗りメッシュアクセスポイント」の事業化(日経11/21)

私も、産後うつでした 昨秋出産の記者体験記 完璧ママ目指さず、相談して 吉田敬子九州大病院特任准教授(朝日11/21)

青春の学舎 最後の九大 来週移転の六本松キャンパス(西日本、朝日、読売11/22、23、24)

紙ふうせん 懐かしの献立で恩返し 九州大学六本松キャンパス 生協食堂(毎日11/22)

ナマコ大量養殖可能に 九大 生殖促すホルモン精製(日経、西日本、朝日、読売、日刊工、熊本日日、南日本山口11/22、23、24、25)

隕石の有機物反応 生命の起源か「東京テクノ・フォーラム二十一」 奈良岡浩・九大教授講演(読売11/23)

インターセックス 帚木蓬生著 自然に背いた医療の原罪 九州大教授 森茂太郎(西日本11/23)

明日へ エネルギー創造 風車に輪 風を集める 大屋裕二応用力学研究所教授(読売11/25)

人権教育命の限り 八十四歳、三十五年目の講義 九大非常勤講師・林さん(西日本11/25)

歯科医が治療費不正に値引き 九大が減給処分(日経、朝日、西日本、読売、毎日11/26、27)

異種高分子 室温で構造入れ替え 九大、新素材開発に道(日経産業11/27)

菅野ダムに人工降雨を 渇水対策で県企業局 九大と共同で調査、研究(山口11/27)

あなたに会いたい 数学の詩人「岡潔」の本を出した 高瀬正仁数理学研究院准教授(西日本11/27)

「博多の内実 宗教都市」 中世・近世 川添昭二・九大名誉教授が史論出版(読売11/28)

知を地域へ 九大の発展戦略 ーレドックスナビ研究拠点 医薬農工と五企業 生活習慣病に挑む(西日本11/28)

周南潤え 人工降雨実験 県と九州大、来月から数回 水不足解消に期待(朝日11/28)

九州が拓く次世代自動車センター オートモーティブサイエンスの展開 塩次喜代明経済学研究院教授(日経産業11/28)

大学院教育事業で九大が最高評価 三件(西日本11/29)

大学生増え街にも変化 写窓〇八糸島に住む 九大伊都キャンパス(朝日11/29)

大正期創部 九大マンドリンクラブ 伝統胸に熱入る練習 さよう南区で定期演奏会(西日本11/29)

戦時中の生体解剖 福岡の医師が証言 九大、生命倫理学会で(長崎、熊本日日、佐賀、高崎日日、沖縄タイムス11/30)

止まらぬ大麻汚染 興味本位の使用やめて 「たばこより安全」に警鐘 九州大大学院・森元教授に聞く(南日本11/30)

インドネシア ハサヌデイン大学長

平成二十年十二月二日（火）、イドリスパトルシ ハサヌデイン大学長が、吾郷副学長を表敬訪問しました。

イドリス パトルシ ハサヌデイン大学長らは、工学研究院との部局間交流協定調印式に出席のため来学の折、吾郷副学長を訪れ、工学研究院のみならず関係研究院との今後の交流並びに独立行政法人国際協力機構からの依頼で本学教員が協力しているハサヌデイン大学工学部整備事業について懇談しました。

中国 新疆（しんきょう） 大学副学長

平成二十年十二月二十六日（金）、塔西甫拉提・特依拜 新疆大学副学長らが、水田理事を表敬訪問しました。

塔西甫拉提・特依拜 新疆大学副学長らは、理学研究院との部局間交流協定調印式に出席のため来学の折、水田理事を訪れ、大学間交流協定を見据えた理学研究院のみならず関係研究院との交流について懇談しました。

同副学長らは、十二月二十七日に共同で開催された国際学術シンポジウムに出席しました。



welcome to Kyushu University

ようこそ九州大学へ

日・エジプト科学技術大学 （E-JUST） プロジェクトマネージャー

平成二十年十二月二十五日（木）、アハマド カイリー E-JUSTプロジェクトマネージャー（学長就任予定）が、水田理事を表敬訪問しました。

本学は、早稲田大学とともにE-JUSTの設立に国内支援大学（中核大学）の一つとして協力しているところですが、同事業のエジプト側実行委員会のメンバーが来学の折、水田理事を訪れ、これまでの協力お礼及び今後の更なる支援について懇談しました。

表敬訪問後は、伊都キャンパスにおいてカリキュラム作成等について意見交換を行いました。

アラブ・エジプト共和国 駐箚特命全権大使

平成二十一年一月十九日（月）、石川薫アラブ・エジプト共和国駐箚特命全権大使が、有川総長を表敬訪問しました。

本学が、日・エジプト科学技術大学（E-JUST）の設立に向け協力を行っていることから、石川大使は日本での中東アフリカ大使会議に出席の折、有川総長を訪れ、これまでの協力お礼及び今後の研究者派遣等への支援について懇談しました。



大宝
九至

表紙写真説明

旧制福岡高等学校 構内の写真



今号の表紙は、昭和十六年春の旧制福岡高等学校構内の写真です。満開の桜は旧制福岡の第一回生の寄付により植えられたもので、今日でも桜並木を思い出す旧制福岡生は多いとのこと。このほかにも、特集には大学文書館所蔵の貴重な写真を掲載しました。

今号の「さようなら そして
ありがとう 六本松」がそれぞれ
の「六本松」に想いを馳せて
いただく一助になれば幸いです。

(九州大学広報室)

編集後記

筑紫キャンパスのプラタナスは晩秋には見事に色づき、桜並木も美しい。この自然環境に恵まれたキャンパスの建設時に発掘された埋蔵文化財を、九大博物館が九州国立博物館に展示するというので行ってみた。九国は、筑紫地区からは箱崎へ行くより近い。出土品の中に、木製の道具で粘土の内側を押さえる外側から叩いて作った大きな甕があった。内側で押さえる道具には年輪型の模様がついており、すなわち甕の内側にも文様が刻まれることになる。甕の使用中心の役にも立たない文様、それはあるいは壊れたときのことを考えて意匠されたものなのだろうか。出土品の研究はまだ緒についたところのようである。時間を超えた想像力の系譜を明らかにしてほしい。

編集委員 教授 松野 健

長崎県のある高校教師から「九大をめざす学力はあるのに経済的理由で進学をためらう生徒がいる。なんとかならないか」と相談されたのは二年前。九州各地の、とくに県庁所在地ではない地域にそういう生徒は多いらしい。昨秋のリーマン・ショック以後、状況はいっそう悪化したに違いない——が、今の私には、そうした生徒たちを勇気づけられるような実質的な「おみやげ」を高校へ持参することができない。ちなみに、主にそうした生徒たちをねらって、赤い門で有名なT大学が、数年前から九州で活発に動いている。奨学金以外の「おみやげ」も、あるとかないたか。

編集委員 講師 渡邊 哲司

九大の最新情報は 「九大広報」の定期購読で。

九州大学同窓会連合会では、九州大学の姿をご理解いただくため、同窓生や在学生のご家族の皆様をはじめ、広く一般の方々にも「九大広報」の定期購読をお願いしています。定期購読は年間六巻分（隔月発行）三千円でお受けいただけますので、ご希望の方は、同窓会連合会事務局までご連絡をお願いします。

九州大学同窓会連合会事務局
TEL.092-642-4328 FAX.092-642-2113
E-Mail sycdo-rengo@jimu.kyushu-u.ac.jp



本誌は、九州大学が発行する『九大広報』を九州大学広報委員会の承認を得て、九州大学同窓会連合会が増刷りしました。